

の縮小せらるゝものであるかを想ひ見よ。

であるから遊戯は確に集團中で發達したものであつて、集團の中でのみ遊戯は其の社會的に有益な誘導的の緊張力を得ることが可能き、斯くて他に遊戯者が居ると云ふことは大に活動を刺戟して愉快を増させるものである。

#### 第六節 起原が本能的文化的である個人的欲望

(へ) 宗教的欲望、——既に述べた凡ての他の欲望と同様に、宗教的欲望は分離を鼓吹し且つ社會的分化を促進するものであつて、分化が統一と等しく社會の發達に缺くべからざることとは云ふまでもないことであるが、而も大體から云ふと宗教に満足を求むる欲望は從來却つて社會的統一の發展に重要な役目を果さないでもなかつた。

宗教的欲望といふのは忘我若くは贖罪若くは歸依等の儀式によりて不可知

界と親しく關係を結ばうとの渴求を意味するものであつて、是等の關係は云ふまでもなく不可知界の助力によりて人間の弱點と無知との繫縛から脱れようとすることを其の目的とするものでなければならぬ。

それで吾々に宗教的の感興を興へる欲望は、特に社會發展の初期に於ては殆ど人間生活の一切方面に影響したのであつて、初め宗教は纔に宇宙の不可解な恐ろしい力に對抗する防禦手段たるに過ぎなかつたが、團體生活の發達するにつれ宗教は一變して敵に對し團體を防禦する手段となり、それから公衆的の崇拜が發達するに至つたのであるが、更に此の苦しい世渡りに神の助けを得ようとの人間の經濟的利害關係と結びついて、宗教は様々な祭禮や聖餐式やを創設するのであつた。而して是等の祭禮や儀式やが社會的に如何に重大な意義を持つてゐるかは蓋し何人も熟知せる所であらうと思ふ。

倫理と宗教とが互に手を握つてからは、宗教が行爲に新しい力強い制裁を



與へたに對し、倫理は又宗教を變形して人々の單なる姪慾と貪慾とを達する所以の方便から、社會化された人格を得る所以の方便たらしめたのであつて従つて祈禱の題目は最早や金庫や食堂やの祝福ではなく、却つて「清い手と汚れない心と」の憧憬となつたのである。

最後に釋迦とかソクラテースとか基督とかマホメットとかのやうな人々のために、宗教は人類や國家や民族やの利益のために身を犠牲にさせるほどに強烈な社會化的勢力となつたのであつて、宗教は今日尙ほ依然として氣高い行のため、或は困難な境遇を怕々として忍ぶため、又或は一見絶望的にさへ見える事業のために雄々しい靈感の最も有力な源泉の一つたるに相違ない。

(ト) 倫理的欲望、——倫理的欲望は本來團體生活の制裁から發生し、宗教的欲望以上に社會形造の樞要な要因をなすものであつて、主として正義に對する情操として現はれ、主我的の諸衝動を拘束し、兼ねて社會的連帶と社會

的關係の安固とを助長する。

即ち其れは社會的關係の完成に寄與する比較的の動機を補足するものであるから、社會的關係に於ける私心を挾まない協力とか抽象的理想主義など、他人のために奉仕しようとする理想が今は利益を得ようとの貪婪心とか敵に警戒する恐怖心などに代らうとするものである。

宗教と結び付いて復た倫理的欲望は宗教で所謂「神の國」など呼ばれてゐる一種の理想社會中に包含されてゐるやうな内容を宗教に賦與するものであつて、即ち倫理的欲望は他の社會力である飢や戀愛やを拘束したり、又肉慾的並に利己的欲望の合成物である富の渴望やに嚴密な制限を加へたりもし、斯くて快樂的の欲望を制遏して感覺の一層柔かな享樂に人々を導き、公平を愛し同情心を哺育するから其れが社會的結束に缺くべからざる力であることは固より云ふまでもなからう。



(チ) 審美的欲望、——審美的欲望が本來動物生活に基礎を置き淘汰と遺傳とに依つて働いてゐる眞の生活力であることは社會學者ワードの夙に唱道してゐる點であつて、其れは生物界に在りては實に美事な羽翼とか美はしい花とか芳ばしい香とか、並に心や目やを惹きつけて果實などを愛させることに發現する。

美の意義は植物にもあれ或は動物にもあれ元來は生存の便宜てふことに基調を有し、即ち美を持つたものは畢竟生存の便宜と機會とを餘分に有する所以であつたけれども、後には其の功利的の起原の意義が失はれても尙ほ審美的欲望は凡ゆる點で生物の理想となるに至つたのである。理想が人生の凡ゆる方面で何時も力強く働いてゐると同様に審美的欲望も亦甚しく社會的の力となり、斯くて政治の様式とか教育の方案などに關する理想でさへ、今日尙ほ依然として「美はしい」と云ふ語を附するを以て、寧ろ必然と見做さるゝに至る。

つたのであつて、此の點から云ふと審美感は實に人生の理智的及び實際的方面にまでも沿く行き亘つてゐるものと云はなければならぬ。

原始人の間に存する審美的欲望は、多く諸動物間に存するものと異なる所なく、其れは云はゞ生存の諸條件に適合するやう性的淘汰で種族を保證する所以に外ならぬものであつて、審美的欲望を満足させるために人類の出産率は他の下等動物のそれと比べて漸次低下するやうになつた譯であるけれども、理性の發達するに従ひ、人は自然界の緩漫な廻り遠い仕方を助勢しようとして、そこで原始人の間に行はるゝ彩色法とか切斷法並に粉飾法等が發生するに至つたのである。

之れと同時に又服裝——の便利も不便も——も發生するに至つたのであるが、美に對する愛情を刺戟する人爲的方法一たび發生するに至るや、人間の發明力は非常に重視さるゝやうになり、斯くて一方に於て人の智力は特段に



個人的の創造の方へ刺戟され且つ指導されたに反し、他方に於て集團の理想は美の方向に統一されて、其れが社會の進歩と統一とに貢献したこと決して尠少でない。

(リ) 理智的の欲望、——原始人は自らの理解しない現象に出會すると、最初は本能的に之れを恐れ後には衝動的に行爲し、斯くて危険の無くなつた後で其の何であるかを考へたのであつて、下等動物と同様に能く其の思索を完うすることは可能なかつたかも知れないが、併し彼れの發達する精神は危険が最早や脅さなくなつたからと云うて必ずしも満足してゐることはなく、屹度斯う問ふたに違ひない、即ち其れは何であつたか且つ何故に起つたかと。

是れは云ふまでもなく宗教と哲學との萌芽であると同時に又實に科學の萌芽でもあつて、即ち此の様な好奇心を満足させようとするのが吾々の理智的の欲望である。詳しく云ふと人は自らの觀察して蒐集した總ての現象が何であ

るやを臆測したり穿鑿したりすることに興味を感じるものであつて、其の興味は單に自然界の包藏してゐる、危険から解除されようためのみから發するものではなく、却つて自然界の神秘を自分流儀に解釋することから發するものであるに違ひない。

即ち此の様な方面で仕遂げられた愉快は、他の何れの欲望を満足させた場合の其れよりも一層甚しいものであつて、其れは云はゞ一時途方に暮れた精神の轉化に次ぐ激しい情緒的の反動から半ば來るものとも見られないではない。が兎に角以前には混惑があつた所に今は整頓があり、復た不確不安があつた所に、今は的確な真理の明るい平穩な確信がある。

斯くの如くにして人間の理智は遂に自然界の一切即ち海の魚も空の鳥も其外地上に生きとし生けるものゝ悉くを支配し得るやうになつたのであつて、人は單に是等一切のものに生存の競争で打勝つたばかりでなく、又是等を捕



獲し飼ひ馴らして自らのために使役することさへ可能るようになってからは彼れは明に其の有利な關係を認め、自然淘汰は此に於てか理智的淘汰によりて補足され且つ助成されて彼れの發達は自らの意志のために急に其の進路を速めることが可能た。

さうして今や同情的よりは寧ろ意識的の社會關係が行はるゝやうになり、協力と組織との發明は一切の社會的並に經濟的活動と相伴ふて發生し、斯くて人間の一切の欲望は多少なり理性の感化を受けるやうになつたとは云ふもの、エルウッド氏も謂つてゐるやうに理智の役目は社會の組織によりは寧ろ主として其の進歩の上にあるものに相違ない。

と云ふのは一定瞬間に於ける社會の組織は多くは本能と習性と感情との仕事であるから、従つて之れを説明するには主として是等の言葉を用ゐなければならぬけれども、之れに反し社會の進歩は多くは人間の理智的生活の成果

であるからであつて、換言すれば社會進歩の基本は理智の活動に由る知識の徐々たる蓄積と、且つ其の知識の漸進的合理化とに存するものでなければならぬ。であるから文化など稱するものも畢竟するに理智的業績に外ならぬものではあるまいか。

#### 第七節 欲望の混合から發生する感興

(イ) 富の感興、——或種の肉慾的、快樂的、主我的並に愛情的欲望等から混成されてゐる富の感興は、社會生活に影響する感興の中で一番顯著なものであつて、前にも一言したやうに吾々は單なる生存のための競争から富のための競争へと經過して來たのである。

人が富を欲するのは、畢竟其れが興ふる權力と娛樂とを欲するからであつて、富と其の利用とに對しては凡ゆる階段の欲望があり、或人は純然たる貪



慾に見えるまでに只管黄金を貯藏し崇拜し、又他の人は單に刹那的の快樂を満たすために其れを欲望するに過ぎない。が要するに人が富を渴望するのは其れが彼れに或種の快樂か或は利益かを與へるからに外ならぬのである。

けれども社會的見地から觀察した富の使命は主として其れが社會的權威を得せしめる所以の手段たる點に存するのであつて、之れがために人々は苦役もしたり犠牲も拂ふたり或は一時快樂や特典やを放棄したりもし、又之れがために互に合同して會社を起し、而して世の需要に應ずるやう社會生活を形成するから、其れが人々の凡ゆる社會的活動に影響を及ぼす重大な社會力であるや固より云ふまでもない。

(ロ) 政治的感興、——政治組織は元來人々の經濟的慾望を満足させ得るよ  
うな機會を多くしようとすることに其の起原を發し、歴史上からは單に經濟的慾望を満たすためばかりでなく、又敵を防禦する必要上からも政府を實現

せしめた所以であるけれども、更に此の二原因と結びついて權力を熱望する親分肌の指導者の野心が加はり、斯くて貪慾と恐怖と野心と虚榮とが結び合  
うて此に吾々が政治的と稱する感興を誘發するに至つたのである。

近年に至り國家は少數富者の權力を多數者の利益のために拘束する所以の  
社會化された手段であると思ふやうとし、今日では國家を以て權力者と  
同様に普通人をして出來得るだけ充分な自我表現の機會を得せしめるための  
保證であるとするに學者の見解が一致してゐるやうに想はれる。

それで慈悲深い賢明な親達が其の我儘な兒童を、共通の利益を尊重する社  
會化された人格者に育てようとするのは洵に當然のことであつて、由來政治  
的の感興が人間社會に如何ばかり素晴らしい結果を貽したかは蓋し爰で縷説  
するまでもなからう。

即ち社會發達の初期に於て全然異つた部族や人種やを悉く吞噬したほどに



包容的であつた社會組織は、人々を吸引し魅惑して聽ては社會的意義を有する帝國を建設しようとしてまで恐れ、斯くて分捕品の熱望と指導者の野心とに其の源泉を發して帝國に對する人々の情熱は、一方に於ては彼等をして彌々固き社會的結束をなさしむると共に、他方に於ては壓迫と暴政との有効にして且つ亂暴な方法で人々をして益々社會化せざるを得ざらしめ、特に國民建設時代を特標した主權に對する競争に於て社會的體制は漸く完成せられ、そして縱へ幾部分強制のためではあつても、兎に角人々が如何にして相互に一致するかを知るに至つたと云ふことは、主として之れを彼等の政治的感興に歸せなければならぬ。

(ハ) 宗教的感興、——人生の不安から保設された慰安を求めむるために、不可知界と親まうとする靈の欲望から發達した宗教が、社會の建設に重大な役目を持つてゐるのは云ふまでもないことであつて、第一に恐怖と功名心と、

第二に愛情的、休養的並に宗教的の諸欲望とは、相混和して此に吾々が宗教的感興と稱する一種の社會的興味を形成したものに相違ない。

團體の安全と保存とを確保する一方法としての宗教的儀式や祭禮やが、協力の習性を形成するに寄與したことは洵に多大なものであつて、斯くて僧侶の職制が一たび發達するや、社會體制の基礎は既に据ゑられ、且つ超自然的の制裁は團體の指導者の支配と相結んで、敬神と忠義と愛族心若くは愛國心とが同一視さるるやうになり、従つて其れが社會統一に貢獻したことは決して鮮少でない。

共通の神社を崇むと云ふことは即ち共通の感情を刺戟して共通の情操を生むことであると共に、最初の偉大な藝術的衝動を喚起したのは實に宗教であり、世界の最初の建築物は墳墓から發達した寺院や神社やであつて見れば、社會生活に及ぼせる宗教の感化力は洵に偉大と云はなければならぬ。



即ち偉大ではあつたが其れは時代の異なるに従ひそれ／＼に違つてゐたのであつて、其の發端に於て宗教は疑惑の兒であり、危機から生まれた神秘の兒であり、或は保留された希望の兒であり、復た或は壓迫の兒でもあつたが、然し人間の靈は其れを全然人々の手若くは自然の力で滅ぼし得るものであるとは怎うしても信じようとしなかつた。従つて宗教は何時も暗い運命と死の蔭にゐる人々或は手頼りない人々の慈母であつたのである。

偕て然らば宗教の此の様な社會的勢力は、果して何時まで續くものであらうか、一部の宗教家の信するやうに其の威力は苟も人類の存する限り未來永劫に亘りて渝ることのない絶大なものであるだらうか。又一部の科學者哲學者の主張するやうに其の領分は漸次縮少されて遂には全く科學と哲學とに其の城郭を明け渡さなければならぬ運命を有するものであらうか。

是れに對する詳細の解答は固より差控えるとしても少くとも吾々が此所で

一言しなければならぬ點は、宗教——即ち此の世界に吾々自分ではない正義を助勢する力があると云ふ信念——は單に世界に對する吾々の經驗の結果に外ならないと云ふことであつて、若しも左様だとすれば宗教的信仰は永遠に人間の道徳的理想と始終すべきものでなければならぬ。

と云ふのは人が善は結局惡に克つと信するのは、其の信仰が彼れをして一層善く生存し得せしめたからであつて、更に言葉を換へて云ふと人が或神を信するのは即ち斯くの如き信仰が彼れをして一層能く凶暴な運命の虐遇を忍ばしめ、さうして殘酷にして往々敵對的の勢力に充ち滿てる現世に一層善く生存せしむるからであつて、此の點に於て宗教の人々を感化する力は久遠に消え失せることはないと云うても決して過言ではなからう。

加之、宗教は何時も人々を襲ふ恐怖心と不死の希望でふ二つの最も力強い社會的原動力に依りて、良心では動かさるべくもなく又單獨では到底生存し



得る能力もない人々を結び着けて協力せしめたのであつて、此の場合若しも宗教がなかつたなら社會は果して如何になつたであらうか。それは吾々の愛で説くまでもないことであらう。

(ニ) 理智的感興、—— 智識が人生の凡ゆる方面で有益なものであることは現代の社會生活が繰返し々々證示してゐるのであつて、今後更に増々其の必要を感ぜられるに違ひない。即ち人間を取巻く物質的並に社會的の世界を知ると云ふことは、人生の所期の目的を達するに是非とも必要なことに相違ない。

けれども智識其れ自らのために智識を愛すると云ふことも、縦へ多年の苦學と犠牲とを人々に拂はしむるものではあつても、亦非常な幸福と快樂とを與へるものでもあつて、是等の二つの觀念即ち實用的目的のための智識の欲望と學問の愛とは人々をして幾多の大學校や専門學校等を設立せしめ、斯く

て文學を創造すると共に科學的智識をも蓄積して吾々の社會生活に影響したること決して尠くない。而已ならず此の外更に理智的活動から發生して吾々の社會生活に影響してゐる要因の數も殆ど枚舉に遑ないほど多くある。

(ホ) 安寧の感興、—— 其の一部は苦痛とか敵などの恐怖や食物の欲望やの如き起原が寧ろ本能に屬するもの、他は同情とか社交性とか愛とか憎とかの欲望や並に自我表現の欲望やの如き起原が本能的社會的と稱する階級に屬するもの、更に他の一部は宗教的及び倫理的欲望の如き起原が本能的文化的に屬すべきものを總括して安寧の感興とブラツクマー並にギリンの兩氏は呼んでゐるのであるが、前にも一言したやうに予は寧ろ之れを理想生活の感興と命令した方が一層穩當であらうと思ふ。けれども内容と酷しき齟齬がない限り、命令などに深く拘泥する要もないから敢て固執しない。

要するに此の感興は單に現代の文明社會ばかりでなく、又或程度に於ては



一切の社會的集團をも多くの仕方では影響するものであつて、此の興味の中で夙に共同生活の喫緊な目的の一つと認められてゐたものは健康の感興であつた。即ち肉體の保存とか寒氣や熱等から其れを保護すること、従つて是等に關する様々の設備等は何時でも人の關心する所であつて、斯くて社會生活の健康の維持並に増進に關する種々な様式の設備、例へば住宅衣服の改良問題とか衛生會とか醫學會とか並に公園とか下水等の如き幾多の計畫は實現され若くはされようとするに至つたのであるが、其れは職として此の感興の上に基礎を置いてゐるものに外ならない。

其れは又智識の進歩にも大なる影響を及ぼし、而して科學的研究や並に諸々の學會やの發達をも促がすと共に、兼ねて現今文明國の教育制度に種々な體育法を加味せしめ、或は優種學的運動を勃興せしめたのも主として此の感興の影響であつて、其れが幾多の社會的活動を誘致してゐるのは固より云

ふまでもなからう。

また此の感興の中には正義に對する欲望を満足させようとする一種の道德的感興もありて、其れは主として人間行爲の理想の上に基礎を置いてゐるから、人々の行爲は多く此の欲望を満足させようために影響されざるを得ない。而して此れが一たび社會力となるや直に社會的理想の中に這入り、斯くて社會的行動の標準となり社會的選擇や目標は多く之れがために決定せらるゝものであるから、従つて共同生活體は又其のために一段優れた高い標準の方へ導かれざるを得ない。而して近時我國一部の識者間に行はるゝ文化教育とか乃至は文化生活など云ふ主張の標的も、要するに現社會に對する吾々の理想的生活の感興の一飛沫に外ならぬものであらう。



1. Ross, "Foundations of Sociology" chap. VII—VIII.
1. // "Social Control", PP. 1—40, 87—360.
1. Baldwin, "Social and Ethical Interpretations in Mental Development", PP. 484—491.
1. Small Vincent, "Introduction to the Study of Society", PP. 174—7.
1. Small, "General Sociology", P. 405—407.
1. Hayes, E.O. "The Social Forces Error",  
(American Journal of Sociology, vol. XVI.)
1. Ratzenhofer, "Die Soziologische Erkenntniss, S. 54—66.
1. Stuckenberg, "Sociology", vol. I.P. 207.
1. Ellwood, "Sociology in its Psychological Aspects," chap, XII.
1. // "An Introduction to Social Psychology", chap. III.

1. Blackmar & Gillin, "Outlines of Sociology", part III, chap. II.
1. Semple, "Influence of Geographic Conditions".
1. Buckle, "History of Civilization in England", P. 29.
1. Giddings, "Inductive Sociology", P. 98.
1. // "Elements of Sociology", PP. 267—9.
1. // "Principles of Sociology", PP. 79—194, 263—375.
1. Spencer, "Principles of Sociology", vol. I. PP. 564—75.
1. Ward, "Pure Sociology", chap. XII.
1. // "Dynamic Sociology", vol. I. PP. 468—82.
1. // "Psychic Factors of Civilization", PP. 116—24.

- 一、遠藤隆吉著「社會力」  
 一、納武津著「民族性の研究」



## 第四編

## 第一章 社會活動

## 總說

一切の社會形態が社會活動より發展するものであることは云ふまでもないことであつて、其れは恰も小さな蛤はまぐりが生長して自分の上に殻の家を造るやうに、各々の社會活動は自らの周邊に或種の社會形態を作るものである。けれども最初人々若くは團體の活動によりて其れに對する要求が喚び起されるまでは活動の法則とか若くは規則など云ふものは必ずしも設定せらるゝものではない。

多くの場合活動は其の形式的の承認並に制度の形式的の確立に先だつもの

であつて、社會活動は個人のそれ等と同様に、或種の感せられた社會的要求の満足を確保するために社會的集團が自らの環境に順應しようとする努力から發するものであるから、吾々が社會の活動によりて其の組織コムボジツション立を、又社會の諸々の機關とか部分等の機能によりて其のやうな機關や部分やを、判斷するのは素より當然のことではなければならぬ。

ワードの如きは社會體制の目的を其の機能にありと信じ、従つて社會活動の完成を以て人間制度の目的であると主張してゐるのであるけれども、本來社會活動は單に人類の欲望を満足させるために外ならぬものであつて、社會構造を組立てゝある恒久的の人間制度も、云はゞ其の結果附隨的に創造されたものに違ひない。即ち最初は社會構造の無意識的の創造がありて後に意識的努力が現はれ、而して其の指導の下に語を更へると社會の意識的指導によりて、社會構造は變形もされ若くは改善もされたものに相違ない。



## 第一節 社會活動の第一様式

人間の最初の一般的努力は本來感覺的の衝動から發生するものであつて、先づ飢餓の感じは人をして之れを満たさうとする努力を爲さしめ、次に寒さの苦痛は住地を變ずることにより、或は小屋を造ることにより暖さを求めしめ、更に友達に對する欲望は彼れをして友を求めしめ、恐れと愛との情緒は彼れをして其の欲望を満たす方面へ行動せしむる。

元來我慾若くは自我感興は是等一切の唯一の基點ではあつたが、社會的淘汰作用により若くは集團中の最大多数者のために極端な主我的個人を意識的に排除することにより、斯くて徐々に一般的或は社會的感興が發達するに至り、先づ第一に本源的社會活動の一つである感情が社會的抑制のために修正さるゝやうになつたのであるが、個人の主我的感情の社會化は確に團體の利

益になるやう自制によりてなされた團體保存の便宜のために増進されたものに違ひない。

下等動物に於ても此の種の抑制は半ば幼期の延長された結果から、又半ばは自然淘汰から夙に發達してゐるものであつて、斯くて個體の保存と持續とに對する本能は、聽て種族若くは社會集團の保存と持續に對する欲望に擴大されたのであるけれども、要するに全體としての社會の究局の目的は所詮諸個體の生存と幸福とを保證するにあるものでなければならぬ。

と云ふのは社會にして個人を破壊に導けば、社會も亦自ら滅亡しなければならぬからであつて、由來人間社會が最も繁昌してゐるのは、之れ人が同類と協力する社會的の動物であることを示すものであると同時に、又社會が彼等に生存の最高機會を與へる恰好の證左ともなるものではなからうか。

人類の原始的社會活動には固より完成された社會構造もなければ、又其の



究局目的も認められなかつたのであつて、人は單に自らの自然的欲望を追及するに急にして、其の努力の多くは主として自らの物質的並に社會的の要求を満たすために費され、従つて社會構造を造らうなどとの意圖は勿論なかつたけれども、其れが偶々ワードの所謂「協力」(Synergy) シナジー てふ作用に進展して、此に社會構造をも乃至は其れの様々な部分や附帶的の活動をも生ずるに至つたものに相違ない。

## 第二節 社會活動の第二様式

個體の保存は漸次社會的團體の保存に移つて行つて、團體を意識する諸個人の小さな核心は斯くて其れ自らの生存を保護するために單位として働くようになり、各々の團體の各々の成員の意識的社會活動は此に於てか本能的活動に代つて團體保存に導かれるやうになるものである。

即ち團體を保存しようとする共同的の感興は、防禦のための戰鬪に於て能く現はれるものであつて、其の時は一切の成員は共同の計畫のために結合し復た其の様な團體的感興は諸々の成員が共通の利益を維持するために協力する場合の政治の發達にも見られないではない。

一團體の風俗とか傳統などに遵ふことも亦總ての人々をして一つの單位として行動せしめ、斯くて團體の意志てふ一層高い力のために自らが統制されるやうな氣持になり、彼等の感情や欲望やは今や單に自然環境のみにはなく、又新しく作られた社會環境によりても抑制されるものであつて、此の様な抑制は次第に法令とか規則など云ふものに體現して、團體の保存のために形式上缺くべからざるものとなるのである。

而して經濟的の活動に於ても最初人々は他人には關係せず獨立して食物を探したのであるが、初め本能的であつた食物供給は後には意識的社會的に決



定されるやうになり、而して團體で狩獵をなし其の結合した勞力の成果を分配するに至つたのである。

其外、海濱に鯨が見付かつても或は波の中で捕へられても、其れは單に見付かつた者捕へた者の所得ではなく、却つて其の家族若くは部族の全體に屬したのであるから、況んや共同して防禦され保護され或は製作された田畑とか家屋などの一切の附屬物は悉く團體の所有であらねばならぬ。

勿論何れの場合でも個人的の活動は依然として全く絶えることはないにした所で、團體的の活動が漸次重大となるに至つたことは云ふまでもないことであつて、即ち此の様な團結的活動によりてのみ、人間の現在の發展は遂げられ、斯くて社會進化の行程中に社會秩序と經濟生活との諸活動は、次第に發達して遂に今日あるやうな非常に複雑にして分化した政治的並に經濟的生活の様式となるに至つたものである。

### 第三節 社會活動の第三様式

生の執着と其の反對に死の恐怖とは進化の競争の基底を流るる二大動機であつて、此の兩本能は單に人類の生存を説明する原則たるばかりではなく、又下等動物や人間やをして危険から逃れて死を避けしむる幾多の方法も、敵と闘ふことも、食物を得ようとして獲物を攻撃することも、其れとの戰鬥を樂むことも、其外苟も直接的の欲望を満たさうとする諸々の活動も、職として之れから發生するものでなければならぬ。

是等の二大原動力は更に種族の永續に必要な性慾的の本能によりて補充されるものであつて、本來人類が子孫を欲求するものであるか否かは疑はしいことであるにしても、兎に角凡ての社交的動物の間に次第に發達するに至つた友を求むる欲望と、性的交際を欲する要求とに次いで、子孫に對する欲



望が現はれたものに相違ない。

動物生活の階段を遙に下つて行くと親は子に對して必ずしも關心を持つてゐるやうには思はれない。が魚族などになると既に巢に對する心遣ひが見え、それから更に一層高等な或種の動物に至ると卵や幼者に對する母親の關心は現はれてゐるけれども、父親の關心は家畜の場合などでも明かなる如く、多くの動物にとりては尙ほ未だ極めて微弱である。

が群棲動物になると父親の顧慮は漸く幼者と其の母とに對して向け初めらるゝことが、例へば雄鷺や其他の或種の雄鳥を見て知らるゝのであつて、人類の間でも社會發達の高いと低いとにより父親の關心に非常な逕庭がないでもない。が其れは畢竟するに自然淘汰の作用と適者殘存の理法とに因り、父親の關心の度合の大きい方が生存に一層適合するからでなければならぬ。

子に對する此の様な本能的の關心は、人類の歴史に洵に重大な結果を生み

て兒童をして家庭の中心たらしめ、其れの手頼りない期間を保護するため建物の必要も起り、又永續的の住家の建設も必要となつたのであつて、語を換へると兒童の周邊に一切の初期の社會的聯結線が集つて來たと云うても決して過言ではない。即ち家庭てふ觀念を取捲いて様々な動機も發生し、斯くて全集團をも永續せしめようとの優しい感情とか情操とかい、家庭の一切成員間に發達するに至つたのも固より當然のこと、云はなければならぬ。

それから社會進化の行程中に種族を保存するための意識的努力が現はれらるに至つたのであつて、斯くて或種の風俗とか法律などで結婚の關係を規定したり、又或場合に於ては人々は大きな人種的團體以外と若くは團體内の近親とは結婚することを禁せられて、妻を嫁るには是非とも同一種族の集團内の大きな社會區劃からでなければならぬと強制されたりもしたけれども、然し其様規定が何ほどまでに種族を保存するための利益の意識によりて増進



されたかは固より知るべくもない。

が少くとも今日では其の様な規定は、殺兒とか兒童労働とか乃至は兒童虐待等に對する幾多の法律と共に、凡て意識的に種族の安全を目的として設けられたものに相違なく、其外多くの仕方では社會的集團は自らを保護し、且つ自らの存在を保全しようと努力してゐるのであるが、斯くの如き社會活動が社會の存在に缺くべからざるものであることは云ふまでもなからう。

#### 第四節 社會活動の第四様式

生活の標準を高めたり社會の能率を増したりするためにも多くの努力は様な方面に注がるゝものであつて、其の中の主たるものは蓋し人間の物質的境遇を改善しようとする一切の企圖であらう。

即ち食物の供給を増加しようとしたり食物を貯藏し且つ保存する方法を發

明したり、食物の品質を改良したりすることは、物質生活の必需品の供給を一層恒久的ならしむると共に且つ規則正しくならしめて、飢餓のために精力を喪失することを防ぐものであるから、其れより生ずる集團の餘暇は以て他の方面を改善することに費すことが可能なのであつて、社會の物質的境遇を改善するに役立つ科學上の發見などは多く此種の活動の成果に外ならぬ。

また人々を體育的に訓練したり疾病から人々を保護したりすることも、同様に此の部類の社會活動に屬するものであつて、其れが社會の發達を増進せしめたことは敢て説明を要するまでもない。休養が社會の進歩に重大な役目を持つてゐるものであることは近頃の學問で漸く明瞭となるに至つた次第であつて、遊戯は實に社會の最高發達と至上安寧とに缺くべからざる要素であるから、従つて此の方面の社會活動は人類の進歩に極めて重大なものと云はなければならぬ。



## 第五節 社會活動の第五様式

能く組織された一切の社會は自らの統一と力とを維持するに缺くべからざる不文道德律を持つてゐるものであつて、即ち自らの道德的標準を高めようとの目的から、例へば禁酒會であるとか動物虐待禁止會であるとか、其他多くの救濟會若くは慈善會など稱するものが設けられてゐるのであるが、其等は要するに不幸な特殊階級者の地位を改善させようとの道義心から發するものに外ならぬ。

即ち人々を社會的に一層有効に團結せしめて、集團の統合と調整とを於善き社會的目的のために増進せしめることは、之れ纏て社會を一層高い標準の上に推し擧げて其の勢力と氣力とを加へることであるから、其の様な努力は單に社會的浪費を減するに役立つばかりではなく、又同族的團體の生存と長

壽との機會を多からしめて、全體としての其れの勞働能率をも大に増さしめるものであるに相違ない。

社會の道德的活動と密接な關係を有するものは人々の趣味を高めたり、且つ美感を養ふたりする審美的活動であつて、確に美を愛することは生に執着し生を向上せしむる所以であると共に、剩へ吾々が眞理と呼んでゐる社會的の諸目的や諸標準やに對する熱望とも緊密な關係あるものであるが、之れに反し醜は人々を墮落せしむるものである。

藝術は元來道德的にも將た不道德的にも兩様に活用され得るものであるから、其れを如何にして社會的に最も多くの効果を擧げしむべきかは、素より其の利用の適不適に由るものであつて、一概に之れを斷定し去ることは可能ない。

現に匈牙利では音樂のために懶怠な情緒的生活が發達しようとし、又獨逸



でも情緒に及ぼす音楽の酷しい不斷な影響のために、論理的發明的の思想力が漸次衰へやうとする傾向があるとは社會學者ブラックマー氏の語る所であるが、之れは心理學上から觀察しても必ずしも豫期されないことではない。

と云ふのは行動に現はれない情緒——これは極めに重大な社會的原動力であるから——を徒らに刺戟し鼓舞することは、即ち情緒的生活と實際活動との自然連絡を却つて萎縮させること、従つて社會的頹廢を誘發する事であるからであつて、且つ又現今多くの文明社會で通俗的に行はれる例の刺戟の多い一種の急調な音楽が、縦ひ幾部分疲れた人々の能力を喚起し慰撫するには効果があつても、而も社會の上に果して有利な影響を與へることが可能であらうか怎うかは大きな疑問と云はなければならぬ。

けれども全體から云うと藝術は吾々の理想を高めて社會的行動を鼓舞し、且つ自然界に於ける美を研究せしめて吾々自身の性情の最も美はしいものを

開發させるものであるから、此の種の活動は確に社會の進歩に重大な地位を占めなければならぬものに違ひない。

#### 第六節 社會活動の第六様式

文化てふ語に標準的の定義を下すことは可能ないが、社會學の意味から云うと、其れは吾々の能力の發達と共に智識の上達並に藝術の鑑賞を意味する外に、更に信仰の向上と行爲の洗煉とを意味するものであつて、社會の文化に最も直接的に寄與する社會活動は之れを大別して宗教的、教育的、而して科學的の三つとすることが可能であらう。

(イ) 宗教的宣傳に執掌してゐる幾百千のものは直接間接に凡て人々の宗教的信仰を變へようと力めてゐるもののやうであつて、今日では宗教は理性とよりは寧ろ情緒と最も親密に關係し、宗教をして社會的活動の一大動力たら



しむるのも主として其の點に基づくものに外ならぬ。斯くして宗教は社會進化の凡ゆる階級で社會建設のために重大な役目を果たしたのであつて、即ち信仰を低い様式から高いものへ、更に詳しく云ふと社會的に効果の少い様式から多いものへ變化せしむると同時に、社會の行爲を一つの信仰に従はしめることは、少くとも宗教の重大な社會的職能であるに相違ない。

と云ふのは信仰は行爲と極めて密接な關係を有るものであるから、其の點で宗教は一つの有力な社會統合者であるからであつて、社會は固より宗教なくとも必ずしも存在し得ないものではないが、而もそれにも拘らず宗教は何時も社會生活を統合する作用の重大な要素であつた。蓋し民族的信仰心の衰ふる時期は必ず又其の民族的偉大の衰ふる時期であつたことを以て其の一斑を察することが可能であらう。

ロ) 社會の教育的活動は文化の働きによりて社會を進歩せしむるための最

も積極的にして且つ直接的な動力となるものであつて、人々を無智より理解に獎め、理性と情緒とを均衡せしめて、人々に合理的の指導と統制とを得しめ、又幼年者には有効な産業を教へて善良な市民たらしめ、且つ一般生活の理想を向上せしむる等主として教育的活動の役目であつて、社會の意識的活動が最も能く現れてゐるのは即ち此の方面を措いて他にはない。

(ハ) 科學の目標は眞理を探究するに在り、且つ其の究極の目的は其れをして社會に有益なものたらしめるにあるから、科學的の運動は一面に於ては正しく教育運動の一部と見做されないこともないのであつて、科學上の眞理が發見されると、直に之れを實用に供しようとする努力が試みられ、斯くて科學は人類の物質的幸福に缺ぐべからざるものとなるに至つたのである。

それで或部族が現代文明を採用するに當り、苟も科學の供給する智識を利用することが可能なければ、彼等は進歩するよりは寧ろ衰亡するの外ないも



のであつて、此の原則は從來野蠻民若くは未開種族が現代文明と接觸する場合に殆ど除外なしに行はれたのである。

即ち折角採用した生活法は現代科學の力を充分に利用し、且つ支配することが可能なかつた爲め、彼等は文明の利器を擁しつゝ遂に却つて自墮落するの外はなかつたのであつて、言葉を換へると彼等は單に文明の外形的短所のみを學んで、科學や道德やの訓ゆる内面的の眞理は却つて拒んだのであるから、彼等が社會的に自滅したのも固より必然のことと云はなければならぬ。

であるから現代文明と接觸する場合、苟も科學的の眞理を生活の實際に利用することが可能なければ、蠻民の如きは悉ひに文明を模倣しようとするよりは却つて自然の儘で居つた方が宜しいのである。

### 第七節 反社會活動

以上述べたる社會活動は社會の進歩を促がしたり或は助けたりする活動であつたが、今度は却つて其れを妨げたり或は沮んだりする活動について一言しようと思ふ。即ち社會的である活動は社會の進歩を助長しようとするものであるに對し、爰で述べようとする活動は却つて團體生活を破壊し、且つ其の發達を遮止しようとするものであるから、之れを反社會的と稱する所以であつて、社會特に複雑な社會になると、多くの原因から斯くの如き反社會的の活動が発生するものである。

多くの反社會的活動は、發生史的に云ふと過去の社會的慣習であつたものが、後の社會には不用となり且つ有毒とさへなつても、而も尙ほ且つ殘存してゐるものとも見れば觀られないこともないが、其れは要するに社會の董督的制度や機構やが人々の習性や性格やを支配し統制し得ないからに基づくものでなければならぬ。



けれども亦多くは遺傳的に習得的に或は肉體的に精神的に、個人的の弱點から發する場合もあるものであつて、換言すれば社會的事情よりは多少なり獨立した原因から發生することのある個人的の變異が、人々の肉體並に精神に幾多の缺陷を生せしめ、斯くして社會の發達に種々な障礙を來たさしめないものでもない。

が現代の文明社會に存する多くの反社會活動、云はゞ盜賊とか浮浪漢とか破落漢乃至幾多の不良兒等の跋扈は、之れ今日の社會制度の缺陷特に社會の經濟組織並に教育等の弊竇に基因するものであつて、切言すれば集合生活を有効に遂げざらしむるよう個人をして社會の習性と理想とを完全に體得せしめないからに基づくものでなければならぬ。

社會生活が一層複雑になると多くの社會的條件は、人々をして其等の悉く、詳しくは一般社會の様々な制度や秩序やに自らを適應することを不可能ならし

め、斯くて其等の諸條件は人々の調和的な適應性を破壊して、其のため現代社會には吾々の理想を裏切つて、寄生者や犯罪者等の數が増々繁殖しようとする傾向がないでもないが、彼等の數が或程度まで増大すると、社會は單り其のために脅かされて止むばかりではなく、又彼等と共に墮落しなければならぬものであるから、彼等の數の未だ甚しく多數でない内に識者は須く之れが救濟策を講せなければならぬ。

が其れは徒に消積的高壓的のものであつてはならない。と云ふのは彼等の出現は一方に於ては現在社會に彼等の發生を餘儀なくする幾多の病患があることを證示するものであると同時に、他方に於ては社會の人々の或種の社會的要求は、之れを合法的に満足させるやう社會的に建設的手段が缺けてゐるために、却つて反社會的の仕方であつて満たされやうとするものであることを證據だてゝあるからであつて、彼等反社會活動者をして社會的たらしむるには



主として積極的並に建設的方法に依るの外はない。

### 第八節 社會活動の條件

個々の人々が單獨的に如何ほど活動しても、其の間に何等かの關係連絡もなく若くは類似一致の點もなければ、其れは畢竟するに社會的となるべき筈はない。それで個人的の行動が社會的となるには、其所に何等かの條件がなければならぬ譯であつて、即ち個々の人々の行動をして少くとも或點で共通のものたらしめなければ、其れは社會的とは稱することが可能ない。

此の點で類似と云ふことは一行動をして個人的たらしめるか、或は社會的たらしめるかの須要な——勿論唯一のものではないが——條件となるものであつて、例へば恐れとか憤るとか云ふ個人的情緒の一表現でも、模倣若くは暗示等の方法によりて他にも類似のものがあれば、其れは即ち社會的となる

のであるけれども、之れに反し其所に何等の共鳴もなく將た同情もなかつたならば、其の恐れ其の憤りは遂に個人的として終るの外はない。

(イ) 類似の第一様式はギツデイツングスの言うてゐるやうに、同一なる血族關係に基づく肉體上の類似であつて、世界の到る所で此の様な類似の様式が社會的に重大な役目を演じてゐることは拙著「民族性の研究」でも既に略ば述べてゐる通りである。

即ち同種の人々は共通的の癖見を持つてゐる、同じ民族性の人々は更に深刻に其れを持つてゐる、其の中でも特に同一家系に屬する人々は一層甚しく相互に對する同情と執着とを持つてゐるものであつて、現今世上に頻發する多くの葛藤や軋轢等も、要は類似の缺乏若くは類似の意識の缺乏従つて同情の缺乏に由るものと稱するも決して過言ではない位に、肉體的の類似は社會的に極めて重大な意味を有つてゐるものでなければならぬ。



肉體的の類似にも種々な等級がありて、ギツドイツングスは之れを家族と  
民族と人種と而して膚色との四つに別けてゐるけれども、科學的見地から  
云ふと之れには勿論異議もあるのであるが、併し大體に於ては必ずしも差支  
へなからうかと思ふ。

(ロ) 類似の第二の様式は精神的並に道徳的の類似であつて、是れは云はゞ  
人々の思想とか同情とか性癖とか目的とか並に是等の凡てが似てゐることの  
謂に外ならぬけれども、是等の類同は苟も感ぜてふ本原的精神作用と、神經  
組織てふ本原的の状態とに類同ある外には存しない以上、即ち精神的並に道  
徳的の類似てふことは、云ふまでもなく人々の腦髓組織の類似の結果に外な  
らぬものであつて、其れは又同一刺戟に對する人々の類似反應の結果とも云  
ふことが可能であらう。

而して同一刺戟に對する類似反應にも發達上三つの階段がありて、其の第

一は何等かの對象に唯だ一寸感興を惹かるゝ一時的の反應性を有するものゝ  
謂であり、是れは例へば瞬間的の恐慌などのやうに、性質は極めて強烈なも  
のではあるが然し永續きがしない。

第二の階段は習性となつたり或は固定した態度ともなつたりする耐久性の  
反應であつて、吾々が多くの場合、人の話し振りとか慇懃振りなど稱するの  
は、要するに人が人と會合する際に受くる刺戟に對する同様な反應の仕方が  
遂に習性的となつたものゝ謂に外ならぬ。

第三階段は精神と意志との一切の複雑した活動を包括せる合理的の反應で  
あつて、此種の同様な反應は多くの人々が共通の危険を避けようとしたり、  
或は共通の利益を目論んだり計畫したり、復た或は何等かの大きな目的を協力  
で仕遂げようとしたりする場合に見受けらるゝものであるが、此種の完全な  
精神的類似は云ふまでもなく單に同一刺戟に對する同心の人々の類反應を意



味するばかりでなく、又精神力若くは道徳力が本質的に同等であることをも意味するものでなければならぬ。

(ハ) 類似の第三様式は可現的の類似とでも稱すべきものであつて、是れは未だ實現さるゝには至らないけれども、併し早晚實現するかも知れぬ類似の謂である。と云つたばかりでは讀者の中には或は不審を抱く人があるかも知れぬから、更に實例を擧げて云うと其れは人々が未知である間は互に氣付かないである相互の性向でも、一たび相會うて互に刺戟したり反應したりしてゐる内には、早晚似寄つて來るやうになる類似の謂であつて、現に吾々の持つてゐる多くの知己中には主として此様な道程を経て互に共鳴もし、且つ同情もするやうになつた人々が決して少くはなからうと思ふから、社會學上是れは見逃すべからざる重大なものと云はなければならぬ。

社會活動の條件として論究すべきもので右の外更に類似の意識等二三の項目があり、其れを心理發生史的に述べると如何ほど簡略に切り詰めても更に數頁を費さなければならぬ。が、其れは到底本書の容す所でないから、次に社會活動の方法について一言し而して此の章を結ばうと思ふ。

### 第九節 社會活動の方法

既に肉體上の類似があり精神的並に道徳的の類似があり、而して可現的の類似があれば、人々は自然に社會的の活動を爲さなければならぬやうに想はれるが、然し其れのみで社會的活動は可能るものでない。

類似若くは類似の意識は固より人々の相近接し結合し信賴し同情し而して親愛する所以の條件ではあつても、而も必ずしも其れ自身が社會的活動の基本たることは可能ないものであつて、類似し若くは類似してゐると云ふ意識



を持つてゐる人々が思想や感情やを互に交換し、斯くして團結することに依り初めて社會活動は可能るのである。

(イ) 社會的活動の第一歩は、實に交通——思想や感情やの系統的交換の謂——であつて、如何ほど多くの相異點はあつても、尙ほ若干の類似と並に其れの意識とさへ持つた人々の集合であれば、其所には必ずや幾何かの交通はあるものであるから、社會的活動のある所に苟も交通のない筈はない。

人と會見した場合の最初の印象は概して混沌たるものであつて、先づ相違の印象と類似の印象とが雜然として心中に蝟集し、其れの何の程度までが果して類似であつて、斯くて吾々をして尙ほ一層交際するに利益と快樂とを得せしむるものであるかと云ふことに關し、途方に暮れしむるものであるから、そこで此の點で一層明確な智識を得ようとする欲望が即て交通の第一動機となるものである。

下等動物にもせよ將た人間にもせよ同類の現前にゐると、何時も筋肉の運動とか聲の調子とか或は有節の言語とかで或種の感情が發露するものであつて、即ち其等の知らず識らずに發する運動の表現は、即ち彼れが其の面接する人に就いて何を最も多く知りたいかと云ふことを傍觀者にさへ知らせるに充分なものである。而して此の事は侵襲とか畏縮とかの感情を無意識的に現はす際に特に然るものであるが、此の様な變化を直覺的に解釋せしむるものは、云ふまでもなく同類の知覺若くは判斷でなければならぬ。

高等動物並に人類のやうな一層理智的な生物になると、同類に對する此の様な最初の刹那的の判斷の後には、必や一層熟考的にして且つ變化のある交通がありて、最初の印象を修正したり確證したり或は擴大したりもするものであつて、交通の起原を正當に知らうとするならば、差當り二匹の未知の犬が初めて相會合する場合の行動を徐に觀察するに如くはないであらう。



ギツドイツングスは云ふてゐる。鬪はうか或は親交しようかを決するに先だち、犬共は互に睨んだり嗅いだり或は齒を剝出したり唸つたりし、斯くてや首や腰や尾や頭を動かして勢多たび感情や確信やの色合を現はすものであるが、是れは要するに相互を鑑識し判断し合ふて、彼等相互の直接の關係を如何に決すべきかを知らうとするに外ならぬものであつて、兒童が互に友人關係を結ぶ道程も之れを殆ど異なる所はない。而已ならず成人の場合でも其の法こそ少しく上品で且つ優長なれ本質に於ては殆ど大差ないのである、と。

斯くて人々の間に團結の基礎が最後に確立せらるゝに先だち、相互を探り合はうとする心は、更に相手の經驗や趣味や信仰や志望やの穿鑿にまでも及ぼうとするものであつて、凡て此の様な交通の動機は一層完全に相互を知つたり印象したり若くは影響したりし、斯くて同類てふ意識を増々明確にしよるために外ならぬ。

(ロ) 交通が際限なく續くと單なる集合ではない團體が出来るようになり、其所でいよゝ社會化は初まるのである。元來交通は肉體的若くは精神的の孰れの意味でも、一人が他を壓服するには餘りに相互が似寄つてゐ且つ餘りに同等であるとの點から、會合する人々をして互に満足せしむるものではあるけれども、併し相識の此の位の程度では次に來る葛藤が必ずしも同情的で且つ愉快なものとは限らぬのであつて、別けても異分子の多く混入した社會に於ては、其れが眞に同化するまでの永い間の鬪争は、割合に辛辣なるを常とするものである。

同化は其の字面の示す如く互に類似しようとする作用であつて、人々が相識の間に於て相互の思想や性情やを感化し合ふて相異點が増々少くなり、敵對心は同意に變じ、斯くて思想や目的やが増々相似寄るようになる謂に外ならぬ。既に人々の最初の會見から交通となり更に團結にまで達して終に同化



するに至ると、此所で社會活動の道具立は一切完備した譯であつて、後は唯だ前章で述べた諸々の社會力がそれづくに其の任を果たすのみである。

## 本書の主要参考書

1. Blackmar & Gillin, "Outlines of Sociology",  
part two, chap. III; part three, chap. V.
1. Giddings, "Descriptive & Historical Sociology", PP. 67—71.
1. / "Principles of Sociology", PP. 376—99.
1. / "Elements of Sociology", PP. 376—99,
1. / "Elements of Sociology", chaps. V&VII.
1. Small & Vincent, "Introduction to the Study  
of Society", PP. 237—266, 331—365.

1. Spencer, "Principles of Sociology," vol. I, PP. 473—485:
1. Ward, "Dynamic Sociology", vol. I. PP. 468—706: vol. II, PP. 540—633.
1. /, "Pure Sociology", PP. 119—144; 169—216.
1. Baldwin, J. M., "Social & Ethical Interpretations  
in Mental Development," PP. 194—302.
1. Lane, "Level of Social Motion".
1. Fairbuncks, "Introduction to Sociology".
1. De Greef, "Introduction à la Sociologie", Tome II.
1. Novicow, "Conscience et Volonté"
1. Ellwood, "Sociology in its Psychological  
Aspects," chaps. VIII.
1. Mackenzie, "Social & Political Dynamics".



1. Le Bon, "The Crowd".

1. Haret, "Mechanique Social".

## 第二章 社會組織

### 總說

社會の組織（若くは機制若くは體制）とは社會の様々な部分が互に相補充するやう作用すべく組立てられてゐることを意味するものであつて、特殊な目的のために組織された一切の集團は、其れが苟も社會生活若くは社會の普通状態に於ての社會秩序にとつて缺くべからざるものでさへあれば、其れは云ふまでもなく社會組織の一部分となるのである。

それで一つの制定たる教會は教導的並に統制的の團體として社會生活にとつて缺くべからざるものであり、復た銀行とか取引所等の如き凡ゆる業務や事業なども、同様に經濟上の重大な役目を果たしてゐるから、共に社會組織の一部を構成してゐるものと云はなければならぬ。



是等の私人的諸社會組織の上に、更に國家といふ大きな組織があつて、其れの内の幾多の様々な小區劃と共に恰も一種の偉大な機械からくりでもあるかのやうな觀をなしてゐる。是等については後で特に論述するから爰では省略するが、之を要するに社會組織は最初は極めて微弱な社會的活動から初まりて次第に強烈となり、斯くて遂には一定せる人々の組織的集團が其の機能を系統的に繼續するやうになつたものに相違ない。

社會組織に關する以上の解説は特に少しく發達した社會のみに適用さるゝものであるが、其外それは又餘り發達しない集團の中の幾多の社會的關係にも適用さるべきものであつて、苟も固定した社會的關係である以上、縦ひ其れが本能から發したるものであらうと、類似の感情から發したものであらうと、或は意識的の共同目的から發したものであらうと、總て皆社會組織として見做すべきものでなければならぬ。

であるから社會組織の根本觀念は主として社會的關係の永續性でふ事に存するものであつて、即ち斯くの如き關係は時とすると本能に依つて生ぜらるる事もあれば、吾々の好愛する仲間のために喚起さるゝ快感から生ぜらるゝこともあり、又時とすると其の様な關係の利益を意識的に認めることから生ぜらるゝこともあり、更に翻つて觀察すると其れは恐怖と保護とから發することもあり、同趣味から發することもあり、或は威力から發することもあり、又或は優勝者と劣敗者間若くは同等者間に結ばれた契約から發達することもあるが、要するに社會組織は凡ゆる種類の永續的な社會的關係を包括するものであることを忘れてはならない。

### 第一節 諸集團の發達

社會の元始的狀態が同一欲望を追求したり若くは同一刺戟に反應したり



することから、偶然と集合した未だ完全に組織立つてもゐない遊群ホムレであつたと假定すると、偕て然らば其の様な漠然とした構造の集團が、怎うして結局組織立つたものになるに至つたであらうかを考へて見るに、其の遊群の内には更に或種の感興とか活動やを中心として小さな幾つもの群團が形成されたものに違ひない。

時とすると其等の社會的結束は性の感興を中心として集つたでもあらう、又時とすると封建制度に於て見られるやうな、或は原始的の宗教的若くは神秘的社會に見らるゝやうな、權威と服従との羈絆を確立した強い人格者を中心として群つたでもあらう、或は更に經濟上の利益を中心としたでもあらう。が、孰れにしても其の際に必ずや何等かの社會的結束が発生しなければならぬ筈であつて、即ち其れが性的引力であると家族や家庭生活が徐々に建設されて、其れの慣習とか傳統などが生まれるが、同様に宗教的の動機からであ

ると、様々な儀式などが發生し其れと同時に人々の組織立つた團體が出来上るのである。また生計を獲るために種々な産業上の事業に人々が協力し、斯くて彼等は結合して家も建てたり、遊戯もしたり、其他多くの社會的活動をも爲したりし、其れが更に發展して様々な社會生活となるに至つたのである。

けれども様々な社會的感興を中心として發生する是等の小さな社會團體は終には互に獨立して存在するものであるから、其の際は更に彼等總てを統合する必要あるものであつて、それでないと彼等の目的は動もすれば社會的に互に相齟齬し、従つて一集團の利益は臆て他のそれと衝突し、其のために別けても他に敵意を藏した社會でもある場合は、全體の社會の恒久的の利益は多くの場合危地に陥れられないものでもないから、それで密接に關係した人々の全體の生存を完うする所以の利益のために、其の内部に存する小さな諸集團の利益を屈伏させる必要があることは云ふまでもなからう。



であるから獨立した幾多の社會的集團は少しづつ互に融合するか、或は讓歩するかして一つの中心的の機制を形造るものであつて、社會の中の散らばつた幾多要素を固く聯結させる此の様な統合は、彼の酷だしい中央集權的の機制である父家長的家族——それは全體の統制力が全く一人の家長の手に握られてゐる——に其の實例を観ることが可能きると共に、更に一つの例は宗教と戰爭と團結との共通目的のために聯合した多くの民族的集團から形造られてゐる部族に之れを見出すことが可能であらう。

復た様々な部族が尙ほも大きな團體に聯合することも、人間社會の發達するに際し幾世紀を通じて行はれた統合作用の一つの連續ではあるが、併し其れは必ずしも統合そのものではなく、却つて社會のいよゝゝ擴大するに従つて増々大規模に繰返さるゝ社會建設の一つの恒久的要因に過ぎないのであつて、民族的の統一とか連帶とかの進歩は斯くして仕遂げらるゝものでなければならぬ。

## 第二節 社會の合成

社會の合成てふ語を、多くの社會學者は苟も自らの生存を支へるに足る人の一切の年齢や男女や婚姻状態や並に人種的關係までをも、包括した社會の自然的區分を意味するものとしてゐるのであるが、適切に云ふと此の語は意識的の計畫や明確な目的等の結果から發生した集團と對照して、共同の地域を占むる人々の自然的團體を指示するものに外ならぬから、社會合成とは現代社會では家族團體、原始社會では血族團體、而して原始並に現代の兩社會では多く血族關係から發達した村落とか郷黨等を稱するのである。

それで原始社會の社會機制では特に社會合成が卓出して、例へば家族とか遊族<sup>ホイルド</sup>とか部族とか並に村落とかが最も特色あるものであるに反し、現代の文



明社會では主として利益の一致若くは目的の共通のために形成された組合とか、産業的文化的並に公共的社團等の如き組成的の社會とかが、却つて優勢を占めてゐるのであつて、復た合成社會の特徴は獨立の生存を營み得るやうに實際上獨りで完全なものであるに反し、組成社會に於ける諸集團は互に相依頼しなければ生存を完うすることが可能ない。

往時の社會は主として同族者から成りて、其れが幾重にも疊かさなり合つた家族的關係の諸集團から發達し、斯くして是等のそれ々の血族的關係は社會を結束させるに與つて力あつたのであるが、其れが旋やがて他の社會的結束のためには代謝され、其所で社會は今や血族關係には頓着しない幾多の異つた家族の人々から合成さるゝに至つたものに相違ない。ギツディングスの言うてゐるやうに、此の様な變化は正しく近親族が同一政治區域に於て同族關係に代つた際に起つたのであらう。

社會の構造なるものは明確な目的のために協力する人々の一體が、同様に明確な他の目的のために協力する人々の外の一體と心理的並に社會的に聯合したもの、謂であつて、此の様な機制の基礎は一面に於ては習慣若くは傳統であることもあり、他面に於ては成文憲法であることもあるが、何れにしても社會の機制は或は共同の遊戲感興で寄り合つた運動場の集團でもあり、共通の血液で結合された原始的の部族でもあり、又或は成文契約で團結した高等な組織の國家でもある。

即ち共通の社會的類似と感興とのために意識的に幾多の小さな集團に組織されてゐる一つの團體と、又轉倒あひだに共通の社會的目的のために市とか國家などのやうな一層大きな社會的團體に統合されてゐる幾多の小さな集團とは、其の社會的結束が血族的集團の動もすれば偶然的結束であるに對し、著しく意志的且つ熟考的である所から、之を一層發達した機制と稱するも決して不



當ではない。けれども兩者は等しく社會の機制てふ名辭中に包括さるべきものであることを忘れてはならない。

原始社會に於ける一切の聯合した團體と、並に幾多の家族的集團が合體して遊族となつたものから發生した團體とを、共に社會組成の部類には屬せしめないで、却つて社會合成のそれに編入するのは、初學者にとりては或は一見不可思議に想はれないでもなからうが、併し其の譯は是等の諸集團の職能は、互に相補充して社會的利益を得るものではなく、却つて彼等の各々が互に類似の目的と似寄つた血族關係とを持つた同一種の團體であるからに外ならぬ。

合成社會には人々の數を増加したり、且つ是等の人々を結婚上の縁組とか或は其他の一般社會的聯合等によりて一體に合同させたりするに、社會的統合の意識的努力を必要とするものであつて、時とすると經濟的並に其他の社

會的同盟によつて幾多の民族や國家やが一つの大きな社會に聯合されることもあるが、斯くの如く意識的になさるゝ努力は、要するに社會化の作用によりてそれらの異要素を完全に社會的に統一する所以に外ならないから、其の新しい團體は多く之れを合成社會と云はなければならぬ。

### 第三節 社會の統合

小さな幾多の集團は大きなものに合同され、そして完全な社會が發達するのであるが、其れの發達の初期に於ては此の様な小集團の合同は多くの場合本能的であるか、それとも集團間に於ける類似の認識の結果かであつて、概して云うと其れは人種的關係に基づくものであるが、然し時期が到來すると一切社會の發達は總て自らを意識するやうになり、斯くして自らの意識的努力によりて一層大きな社會に自らを築き上げるやう自ら一つの單位として働



くやうになるものである。

初めの無意識的且つ無目的の状態から、後の意識的且つ執意的統合への此種の變遷の實例は、古今東西の歴史に枚擧に遑ないほど澤山あるのであつて、其外更に一切の集團は、外敵に對して自らを防禦したり領土を擴めたり内政を整理したりもするが、一般に征服、協約或は聯合等の手段で他の家族や部族やを併呑して人口を増大するものである。

其の間に於て一方に於ては自らの目的のために努力しつゝ、而も他方に於ては共通の目的のために他と協力してゐる幾多の小集團から成つてゐる社會團體は、漸次一種の有機的性質を帯びて來るやうになるものであつて、之れを稱してコムト初めハーバート・スペンサー一派の生物學派は、社會を以て純然たる有機體であると主張してゐるのであるけれども——尤もスペンサーは後に至り社會を一種の超有機體(Super-organism)となしてはゐるが——是れ

は勿論物質的の意味でよりは寧ろ心理的のそれに解すべきであつて、従つて社會組織の連結の如きも固より肉體ではなく、却つて共通的の感情や思想や目的や將た希望やのそれであることを知らなければならぬ。

言葉を換へて云うと社會體は即ち共通の目的や感情や理想やで鼓吹され、且つ支持されてゐる男と女とから成立つてゐるものであつて、是等の人々は縦ひ各々自らの意志で自由に動いてゐるものではあつても、而も尙ほ人々の相繼によりて、持續されてゐる永久的の團體に形造られてゐるものであるから、従つて銀行業を營んでゐる人々の集團は、運輸若くは交易業を營んでゐる人々のそれと同様に、現代の社會生活の持續に缺ぐべからざるものでなければならぬ。

此の點に於て社會は、單なる有機體以上の或者でなければならぬ筈であつて、其れは其の成員たる人々をして其れ相當の地位を得せしめ、且つ諸個人



並に諸集團の權利と義務とを確保して、社會的活動を發展させたり社會的意志を實行させたりもするから、其れはスペンサー氏の云つてゐるように確に一つの超有機體であり、或は寧ろ一つの組織體と稱する方更に一層適切なものであらう。

社會が或程度の統一を遂げるようになる、其れは更に新しい幾多の集團に分化し若くは分裂し初めようとするものであつて、是れは特に經濟方面の分勞若くは分業の場合で顯著に觀察することが可能であらう。即ち最初人は一切の事柄を單獨で爲さうとするが、後になつて唯だ一部分のみを爲し其他の事は之れを他人に爲せ、其の代りに自分が彼等の分までをも自分の方面で餘分に爲すのである。

斯くて狩獵者も出來れば農夫も出來また大工も出來更に商人も製造者も運送者も現はれるようになつたのであるが、彼等は最初からそれ／＼に分れて居つたのでは決してなく、例へば初めの僧侶は多くは醫師を兼業してゐたのであつて、後になつて漸く劃然たる二個の職業的集團に分化するに至つたのである。

政治に於ても亦斯くの如く、今日の文明社會では縦ひ多く立法と行政と司法とに判然と區劃されてゐるものゝ、其れが原始社會では今尙ほ政治と宗教的教務の一部たる祭祀の事務さへ包括されてゐるのである。が何れにしても是等一切の分化した諸部分は、互に相依從せる點に於て統合されてゐるものであることを忘れてはならない。

#### 第四節 社會の組成

社會の組成とはそれ／＼に異つた目的を持つてゐて、従つて異つた社會的



要求を満たす互に相依頼する幾多の集團から成立つてゐる社會の組織を意味するものであつて、例へば例へば經濟的、教育的、宗教的、並に審美的集團等それであるが、是等の集團の起源は概して人爲的なるを以て常とする。

合成社會が社會の生存に必要な、一切の根本的社會要求を満たし得るに反し、組成社會は單に一つの社會的要求を満たし得るのみであるから、そこで社會の組成的要素を一名社會的機關と稱するの**も必ずしも不當でないことは**苟も社會を在るが儘に觀察して、其れの總ての部分が如何に互に相依從してゐるものであるかを知るもの、容易に看取し得る點であらう。

が爰で吾々の機關と云つてゐるのも固より比喩的の意味であつて、要は其れの機能と關係とが吾々に一種の纏まつた觀念を暗示するからに外ならぬ、而してスペンサーは社會を組成的に區分して次の様になして居る。

第一は直接に社會の物質的給養に任ずるから一般に給養團體と稱せられて

ゐる大きな經濟團體であつて、是れは人類の要求を満たす凡ゆる種類の財貨の生産に従事したり、其れを變形したり運搬したり且つ交易したりする人々の一切を包括する。

第二は種族の永續を第一の役目とする家族と、生命を保存することを目的とする一切の醫術的衛生的集團等の如き持續團體であつて、其次には電信電話印刷物等の如き智識を傳達する一切の方法を網羅する特に今日では、給養機關に缺くべからざる交通系統である。書籍新聞雜誌等も亦智識を傳達するに缺くべからざるものであることは云ふまでもない。

人間社會にとつて特に重要なものは、教會とか教育制度並に科學文學藝術道徳などとして知らるゝ所謂文化的の諸集團であつて、最後に更に大切なものは調節並に保護系統である。而して後者の主要な役目は、社會に秩序を生じ且つそれを維持するにありて、其の實例を吾國にとりて云ふと、諸外國と國際



的の協調を保ちて、國民生活の獨立を保持すると同時に、國內に於ては立法司法行政等の諸制度並に地方自治政や軍政や而して警察制度やをして、互に其機能を完全に果たさしむることは、之れ總て調節並に保護系統の主たる職能でなければならぬ。

最後に一言すべきは國民教育の目標が文化ではなくして、却つて國家の保護若くは社會の秩序にあると云ふ點であつて、之と關聯して更に讀者の注意を喚んで置かなければならぬことは、隨意團體である勞働組合とか保險會社とか慈善團體とか其他多くの救濟會などが、皆な社會秩序を保持し且つ人々を保護するを目的とするから、多くは此の部類に屬さなければならぬと云ふ一事である。

以上述べた諸組成團體を表示すれば、

一、給養的機關——經濟的、

- 生産團、
- 抽出團、
- 變形團、
- 運輸團、
- 交易團、

二、永續的集團、

- 家族、
- 醫術團、
- 衛生團、

三、交通系統（經濟團に缺くべからざる）、

- (イ) 印刷機並に其の附屬品、書籍、新聞、雜誌等、
  - (ロ) 電話、
  - (ハ) 電信、
  - (ニ) 鐵道、電車、自動車等、
- 社會組織



#### 四、文化的集團、

- 教會、
- 教育制度、
- 科學會、
- 文學會、藝術會、倫理會、
- 社交俱樂部、
- 休養並に運動團、

#### 五、調節並に保護系統、

- 國際制度、
- 國家、
- 立法制度、
- 司法制度、
- 行政制度、
- 警察制度（行政よりは廣い）。

國民教育、  
 隨意團體、  
 勞働組織、  
 保險會社、  
 友愛團、  
 救濟會、  
 慈善會、  
 政黨、

となるのであつて、此の分類は之れを更に分析すれば幾多の小區分に細別すことが可能であらうが、差當りスペンサーに従ひそれらの機關の特殊な機能に基づいて其の中の重大なものだけを掲げた次第である。

#### 第五節 社會の分化



組成的の集團が増々分化し而して其の數が彌々増加するに従ひ社會は進歩するものであつて、社會の生長は主として新しい方面の活動と新しい部分の發展に待つの外はないが、然し其れの發展は必ずしも單調なものではない。即ち社會發達の第一様式は調節系統の分化であつて、此の中に幾多の新しい集團が發達し、斯くしてそれ々に社會秩序の確立と民衆の保護とを目的とするのであるが、之れに次いで産業の分化が實現され、其の各々の集團が更にそれ々の特有な役目を果たすやうになつて、新しい産業は急速に發展し、之れと共に分業に基づく労働者の集團が日を追うて増々其の數を倍加するものである。

また文化が進むと、此方面に關與はるる人々の數が次第に増して、様々な方面に彼等の性能を發揮させようとするものであつて、社會てふ複雑な實在體は斯くして新しい様式や機能やを倍加させる事に由り、又それの各々の特殊

な機關を發達させることに因り徐々と生長するものである。

而して此の様な分化は漸次社會を同質體から異質體へ單純狀態から複雑狀態へ、而して不確定な關係から確定的な關係へ變化せしむるものであつて、社會進化とは要するに是等の謂に外ならぬ。

とは云ふもの、様々な組成的集團の機能が一層注意深く限定され、且つ其の作用が一層確實であればあるほど、是等の集團と社會の統一との間の協力も亦一層完全でなければならぬ譯ではあるが、然るに此の様な分化には限りがないから、従つて社會には到底完成の期がないと云うても誰か其の妄を責め得るであらうか。

社會が健全な發達を遂げつゝあるか、或は他の社會に比し其機能を完うし又は其の機能の數を増加する等穩健な進歩を爲しつゝあるかを、決することは必ずしも困難なものではない。要するに社會組織の完成如何は其れが個人



の幸福安寧を増進する程度の如何に由るものでなければならぬ。曾て存在し且つ自らを持続させて來た最初の永久的の集團は、性若くは同族的の集團であつて、縦ひ其れは吾々の現代の家族とは甚しく類を異にするものではあつても、其れは正しく原始的家族とも稱すべきもので、第一には男女の性的愛着の上に、第二には父系的若くは母系的の孰れかの同族的集團の連結で保證された、安全の上に築かれたのであるが、父及び最年長の男子が集團の首長と見做される程度までに社會が發達すると、其の安全は更に妻及び兒に對する夫及び父の所有權によりて一層確保さるゝに至るものである。

家族は又幼者に永久的の保護を與ふると共に、同一血族關係者を總て聯結せしめたのであつて、想うに家族を組織せしめた最大の原動力は、多分近族的の愛着心であつたらうが、最後に父家長的家族の發生と同時に、共通の神壇の周圍に宗教が家族を引き着けて團結させた力も亦決して少くはない。

既に家族の基礎が大體上確立さるゝやうになると、家族内に於ても更に其の成員間に機能上の分化が始まるものであつて、男子は主として統制並に保護系統の任に當り、女子は育兒並に家事整理の事を司り、斯くして一方に於て家族内に於ける男女の職能上の分化は、他方に於て環境に基づく諸家族間の職業上の分化と相待つて、社會をして増々其の複雑性を加へしむるものである。家族のことに就いては後で節を改めて論究する積であるから是れ以上のことは爰では省略する。

#### 第六節 社會の様式

社會の様式てふ語は人々が互に相結合する場合の様々な社會的關係の仕方を稱するものであつて、吾々が眞に見るのは云はゞ同様な動機で動かれて共通的影響の下に、活動してゐる様々な仕方で結合する人々に外ならないか



ら、従つて社會の様式とは單に吾々の思想でのみ見ることの可能る一種の關係の概念に外ならない。

社會組織の様式若くは構造は學者に依り其の見解區々に分れ、同一學者であつても時に依り尙ほ其の解釋を異にしてゐる場合がないでもない。即ちハーバート・スペンサーの如きは或時は一切の社會様式を制度と見做して、社會を其の主たる活動に基づいて、尙武的と産業的とに分類してゐるかと思へば、又或時は之れを嘉納的と非嘉納的とに分類してゐるのである。ギッディングスの如きも亦此の選に漏れず、或時は社會を發達の順序から觀察して之れを合成社會と組成社會となし、又或時は動物社會と人間社會とに分類し、前者を主として本能的のものとし、後者を理性的のものとすると同時に、之れを更に八種の集團に區別してゐることは、既に第二編二章の「社會の分類」で述べた通りである。

而してギッディングスは更に社會組織の諸様式を分類して(一)私的と公的(二)非認許制度と認許制度、(三)非合同と合同、(四)合成的と組成的などともなしてゐるのであるが、此の場合に於ける彼れの社會組織てふ語は社會構造てふ語と多く異なる所はないものであつて、嚴密に云ふと後者は人間關係の一層習性的となつたものに局限せられてゐるに過ぎぬ。

而してギッディングスの此の様な重複した分類は、主として形式的社會活動が集團に基づくと基づかないとに由るものであつて、即ち公的、認許的、合同的並に組成的の組織が、人々の意識的聯合行動によりて人爲的に創造されるものであるに反し、私的、非認許的、非合同的並に合成的のそれは、集團が未だ熟考的形式的の行動を採るに至らない自然的のもの、謂に外ならぬ。

ロツスは人々の團結様式の主要な心理的特質の順序に依り其れを分類してゐるのであつて、彼れは情緒を以て思想よりは低い組織の順に在るものとし



又「面接しない」集團は「面接してゐる」集團よりは一層熟考的且つ理性的であるとしてゐるから、そこで彼れの分類もギツディングスと同様に必ずしも單純なものではない。即ち之れを表示すれば、

▲思想よりは却つて情緒が優つてゐる順序で、

面接してゐる	群	集
	國民大會、	討論會、
代議員會、	討論會、	代議員會、

▲組織の能率の順序で、

面接しない	公	衆
	宗派、	法人、
法	宗派、	法人、

となるのであつて群衆は他の種の組織よりは思想に支配されることが少ないから、従つて多くは濃厚な感情に導かれて無思慮な行動を敢てしようとする

傾きがあり、討論會は多くの場合自制的であつて單に感情のみに支配さるゝことがなく能く理性に従つて既定の規約等を遵守するけれども、之れを代議員會の各員が概して冷靜な態度と周密な頭腦とで以て、感情を極度に理性で抑へて投票する場合の多いのに比すれば其の差は實に五十歩のみではない。

同様に「面接しない」集團は單に其の心理的反動に於て互に異つてゐるのみならず、又其のそれ々の組織様式の能率に於ても異つてゐるのであるが、併し公衆や宗派や法人やは其の心理的特質に於て、必ずしも群衆や討論會や而して代議員會やとそれ々々密接に照應しないものでもない。

實際、公衆と宗派と法人とは其の組織の明確と能率とに於て互に異つてゐるものであつて、即ち公衆は宗派よりも一層無定形であり、宗派は又法人よりも一層無定形であり、同様に組織についてもそれ々の能率は互に少からず異つてゐると。



ブラツクマー氏も評してゐるやうに、ロツスの分類は心理的特質の發生的順序で排列してゐるから心理學的であると同時に、又組織の社會的能率に基づいて分類してゐるから確に社會學的とも稱すべきものではあるが、然し「面接」と「面接しない」との二要因で社會を分類することは、果して妥當なものであるだらうか怎うか疑ひなきを得ない。

クレーも亦「面接」と「面接しない」との原則を以て社會的集團を一次的と二次的とに区分し、前者は親密な面接的の團結と協力とを特徴とし、之れに家族とか兒童の遊び仲間とか、隣人若くは郷黨等を屬せしめ、後者は即ち一次的集團から發生し且つ一層複雑な關係から生ずる一層精巧な集團であるとすものゝやうである。

以上諸家の説く所は何れも一得一失があり、見解の如何により各自其の價値する所を異にするから、固より一概に之が優劣を決することは可能ないが

少くとも予輩の信する所に依れば此の種の分類は須ら發生順序に由つてなされるべきであつて、之れを補充するに更に社會的集團の本能的同情的階段から、意識的にして執意的の階段に經過する過程を示すに於ては、増々其の正鵠を期し得るに相違ない。此の點に於て人間社會を先づ本能的と理性的とに分ち、後者を更に八種の類型に細別してゐるギツデイツングスの分類の如きは蓋し最も合理的なものと云はなければならぬ。ギツデイツングスの分類の詳細は第二編二章二節にあるから爰では贅せない。

### 第七節 家族の發生

家族の發端が何時何所に起つたかを決することはナカ／＼困難であつて、最下等の人類にも將た高等な類人猿にも同様に家族的關係は存してゐるから見れば、其れは必ずしも優等人種の特有物ではないらしい。或種の鳥類や高



等な哺乳動物の中にも多少なり明確な家族らしいものが存するのは、是は確に自然淘汰の然らしめたことであつて、即ち幼兒を養育するために両親の協力する生存上の必要は遂に家族を生じ之れを持続せしめたものに違ひない。

他の一切社會制度の進化と同様に家族の進化も亦極めて不規則緩慢であつて、太古に於ける人々の性的關係が至つて亂雑なものであつたと想像されるのは固より不自然ではないが、然し今日に於て全然たる亂婚状態にある種族は唯の一つもなく、又此の様な状態があつたことを語る何等の史實もない。偶々此の様な状態に殆ど似寄つた種族があるとは云つても、其れは纔に不定期に結婚をすると云ふこと以上に出ないのである。

斯くの如き境遇の下では勿論恒久的の家族組織はなく家族關係は何時も不定であるが、併し其の不規則たるや想ふに性的關係を本能的に支配したものが、漸次理性によりて支配するやうになつた其の過渡期間に發生したもので

はなからうか。固より吾々の様に廣い經驗もない上に、又下等動物のやうに禁制本能の牢乎とした支配さへない原始人の強烈な情慾が、彼等をして動もすれば社會的に有害な習慣に耽らしめやうとしたのも必ずしも咎むべきことではない。

家族生活の中心觀念が兒童の哺育に存する以上、家族組織の様式が何時も秩序正しい生活の條件に適するやう變形されたのは固より當然のことであつて、洵に人間社會の發達する道程中には様々な幾多の結婚制度が行はれたにも拘らず、現今の文明社會では其れが確乎とした家庭關係と相並んで、一夫一婦制度に限定されるやうになつたのは確に進化の結果であるに相違ない。

家族の系統を按ずるに凡そ二流の源泉から發してゐるやうであつて、其の一つは母系的マトリモニックであり他は父系的パトリモニックと稱することが可能であらう。即ち前者は母を通じ後者は父を通じて人々の血統を辿り得るものとするのであつて、千



八百六十一年獨逸の法學者バホーフエンが其の名著「母權」Mutterrechtを公にするまでは、家族の本來の様式は、一般に家長的のものであると信せられて居つたのであるが、彼れが一たび該著に於て、最初の家族は男子よりは却つて女子によりて主宰されて居つたとの證跡を示して以來、從來の迷妄は漸く一拂されようとするに至つたのである。

尋いで千八百七十六年に至り彼れの主張は更にマクレンナンにより、千八百七十七年には又モルガンによりても補充され且つ支持されたのであつて、特に後者の如きは躬自ら亞米利加印度人の間に永住して、彼等の生活に其の結論の基礎を置いてゐるのであるから、論據の薄弱でないことは云ふまでもないが、然し母家長制を證明するに於てはマクレンナンと云ひモルガンと云ひ共にバホーフエンほどには熱心でなかつた。

が、彼等の一樣に發見した證憑の一切は凡て母家長制とは全然趣きを異に

した母系制が却つて存在したことを示したのであつて、多くの原始人の間には未だ曾つて父家長制なるものは存在したことなく、或は左なくとも其れより以前既に母系制があつたと云ふことは諸學者の一般に唱道する所である。

それで家族生活の状態を表示するには母家長制なる用語よりは寧ろ母系的家族てふ用語が好ましいのであつて、即ち此種の家族に於ては兒は父方の血縁に屬さないで却つて母方の血縁に屬するのに反し、家族の主宰は母の手に歸せずして却つて母の男系血族の手に歸するのである、勿論此の場合でも女子は父家長的家族の下でよりは一層偉大な勢力を團體の事柄に有つてゐるものではあるが。

之れに反し父系的家族は父若くは父の血縁を通じ兒の血統を辿るを特色とするものであつて、此種の家族が發達して後に父家長制となるに至つたのであるから、兩者は決して混合してはならない。



然り而して母系的家族を發生せしめた原因は、必ずしもセルガンの云つてゐるやうに原始人の亂婚に基づくものではなく、事實は却つて母の方が父よりも一層容易く認められ易いからと云ふに外ならぬものであつて、事實、母親に對する幼き間の兒の愛着は、母を通じて血統を辿ることが極めて自然の事でもある其の上に、總ての母系的家族に於ては夫や父又は自分の同族者を見捨てて妻の同族者の所に行つて彼女と同棲したのであつた。

そこで配偶者を同族者以外から選んだ場合は、夫は勿論同族者以外の集團に行かなければならぬ筈であつて、多くの場合其の集團なる女の夫は殆んど一人として同一血族に屬するものがなかつたから、従つて同一血族を以て社會的結束とする時代に於ては、兒の支配權が其の生れた集團全體の手に歸したの固より當然のことであつて、更に其れを其の集團と同一血族と見做したのも洵に自然の成行と云はなければならぬ。

此の様な制度が一たび確立されると、其れは父權が認められた後までも更に永く持續したのであつて、實際母系制を根絶するのは何等かの有力な新しい原動力が立ち現はれなければならぬ譯であるが、狩獵時代に代はる牧畜時代の發展は、正に此の變動を惹き起すに重要な經濟的勢力であつた。

家畜の群に蹤いて行くために家族は他の集團から離れなければならぬ。獸群の番をするに可能るだけ多くの人手は必要である。そこで男は永く家庭から留守をしてゐる譯にもゆかないから、今や規則正しい生活關係が狩獵經濟のために餘儀なくされた不規律に代はるやうになつて、食料も主として家畜の肉に仰ぐことが可能るため、家族の支給者としての妻の地位は、必ずしも無くてならぬ重要物では最早やなくなつた。而已ならず獸群を番する子供の勞働は却つて一層大切なものとなつたのであつて、母系制を打破る抑もの原因は先づ是等の事柄であつたに相違ない。



が更に一つの原因がある、其れは云ふまでもなく戦争であつて、最初女子は多く戦争で捕虜とされたのであるから、勿論男の支配の下に置かれなければならぬ。而已ならず一種の戦利品に過ぎないから單に戦勝者の動産として取扱はれてゐる外、女子には何等の人格もなかつたのであつて、其の生んだ兒も従つて亦捕獲者たる男の所有に歸せなければならぬ。而して斯くの如き女子の境遇が後に到り多少變形さひて、或は賣買結婚となり又或は掠奪結婚ともなるに至つたのである。

斯くの如く男子の權力が一たび確立されて、其れを支持するに非常な力を效したものは宗教であつて、祖先崇拜は敢て必ずしも母系制時代にもなかつたものではなく、其の時とても女神の崇拜てふ形で行はれてはゐたのであるが、祖先崇拜が眞に男性偏重觀と結び付いて偉大な勢力の焦點となるに至つたのは蓋し父系的家族時代に於てであらう。

斯くて女子は蔑められて男子の凡ゆる放縱な性情の玩具に供され、其の子供は一方に於ては經濟的見地から獸群を飼ふための勞働者として使役され、他方に於ては社會的見地から戰闘者として尊重されると共に、今は更に祖先の靈を慰めるためにも非常に價値されるやうになつたから、そこで子を産まぬ女は集團にとつても單に無用であるばかりでなく、又神々にさへも憎まれると云うて酷しく咀はれたのである。

それで不妊は女子にとつて眞に最大な不幸であつて、復た女の兒のみを生む婦人の運命も、かくに悲惨なものであつた。婦人にして一たび貞操を破らんか、彼女は單に其の家族と集團の眼から觀て罪人たるばかりでなく、又神の目からも等しく罪人であつて、祖先崇拜の行はれた時代に於ける姦婦の運命は單に死あるのみであつた。

今日の文明社會に普く行はれてゐる女子の貞操觀念と結婚制度とは斯くし



て初めて發生したのであつて、女子には貞操觀念が著しく發達してゐるに對し、男子には其れが割合に乏しいのも——他にも生物學上の幾多原因はあるが——主として男系制、即ち男子本位制度の及ばせる習性的の影響に外ならぬ。

次に結婚制度についても更に社會學的の論述を進める筈であつたが、餘白がないから其れは何れ他日の機會に譲り、後節では國家の起原について略説し而して此の章を閉ぢようと思ふ。

### 第八節 國家の起原

國家の起原を論ずる場合、一部の學者は主として國家を發生せしめた所以の心理學的動機について云々し、他の人々は國家の發達するに至つた所以の諸々の制度について専ら力説するけれども、何れも一方に執着するのは餘り

正鵠を得たものでない。

前者の代表者はモローであつて、彼れに依ると國家は人に生れ着つた社交性のために發生し、且つ便利を求むる人の自然性のために發達したものである。と、然るに一方に於ては國家を發生せしめた諸々の動機をも無視しないと同時に、他方に於ては其の動機の發現する制度をも同じく看却しない學派がないでもない。

即ち其の代表者の一人であるウイルソンの説に従へば、一切の進歩的民族にとつて政治は非常に夙くから存在し、即ち其れは明確に制限された家族的訓練の中に發生したのであつて、斯くて歷史上の一切中心民族の社會組織と政治（即ち社會組織の外形）とは凡て同一血族關係に源を發し、且つ合同の本原的結束と政權者に對する本源的認容とは全く同一物であり、語を換へて云ふと即ち眞實の若くは假作的の血族關係に基づくものであることを知るに



決して難くない、と。

更に他の代表者の一人であるコムモンズは外の種類の原動力を以て國家の起原を説かうとし、即ち曰く國家は社會の強制的制度であつて、其れは必ずしも社會の上に置かれた理想的の實體ではなく、却つて私有財産制度の支配を安固にしようとする幾多社會階級間の協調の累積した連續に過ぎない、と。更に彼れは説を爲して父家長的家族を以て初めて主權従つて國家の發生した制度であるとなし、其の理由を女子と子供が私有財産として取扱はるゝようになつたのは、即ち此の制度以來であつたからと言ふてゐるのである。而して國家を以て私有財産の母であると同時に又子でもあると云つてゐるのは必ずしも彼れ一人のみではない。

之れを要するにウイルソンによつて代表されてゐる一派の人々は、國家を以て同族の關係と制度とに始まつたものとなし、コムモンズによつて代表さ

れてゐる一派は其れを主として私有財産の制度から發生したものとしてゐるのであるが、前者の職として國家の起原を發生史的に解かうとして尙ほ未だ至らざるものあるに對し、後者は國家發生の一要因——勿論重要な要因には相違ないが——を直に國家の起原であると思はれてゐるらしい點に少からぬ弱點があるやうに想はれるから、吾々は左に兩説を補充し而して多少訂正することにより、國家の起原に關する吾々自身の社會學的論案を下さなければならぬ。

原始的家族が如何にして發生したかは、既に前來の敘述で一通り論者の諒解した所であらうと思ふから、今更ら繰返さないで論述は其の後から始める。原始的家族若くは二三の原始的家族から成立つてゐる遊族——ギツディンホーランドグスに依れば是れは二十五名以上百名以下から成立つてゐる集團中の最低のもの——は最初の社會的集團であつて、是等の單純な集團的關係よりして、既



に自然と其れを統制しようとする最初の努力が人々の間に生じたことは、苟も人間性を知るものゝ容易に看取し得る點であらう。

即ち人の社會的關係は總て集團内にあつたから、云はゞ彼れは眞の虚構の血族的結束によりて同僚と連結されてゐた譯であつて、其の様な簡單な社會的集團の中に於てすら統制の最初の萌芽は既に存在し、其れが發達して遂に政府となつたものに違ひない。而して社會が母系的であつた間は母及び其の同族者が集團を治め、父家長的の時は父及び年長男子が専ら其れを支配したが、特に父家長制の行はるゝ部族の社會組織は非常に強勢であつて、其の家族は密接に統合され且つ治者と被治者との分、明確にして統制も亦極めて峻嚴であつた。

最初に社會秩序を確立し且つ保持するよう國家の主要な職分を不充分ながらも果たしたものは多くの場合家族であつて、外來要素と自然増加とにより

て其の數増大し、斯くて遂に父家長なる首長の指導の下に置かれるほどの一大部族となるに及んで、一層精巧な統制方法を設定する必要が起り、且つ父祖の定めたる習慣や事例やを行ふと共に、兼ねて新しい事情をも取捌くべき何等かの規定を作る必要が生じて自ら立法者となつた。

それから又幾多の部族的家族の不和や捫着やを調停することが慣例となつて、彼れは其のため集團の裁判長ともなされたのであつて、更に父家長を扶けて集團の支配者たらしむるには經濟的導因力も亦決して少しとしない。即ち彼れは單り神々の代表者たるばかりではなく、又實際女子や子供やの所有主でもあり、且つ集團のために其の一切の共有財産をも委託されたのであつて、後になつて彼れの職權は他の幾多の役員に委任されたが、初めは政治の司法立法行政の三權は悉く家長一人の手に委ねられたのであるから、従つて一切の權力の中心である彼れを以て、政治的統制の史的起原の一つに數ふも



誰か之れを拒否し得るであらうか。

既に第三編三章「社會の性質」中でも述べた契約説の微かな根據も其所にあり、有機説の重大な精髓も其所にあり、従つて吾々の支持する心理説の全基調も亦多く其所に存することを忘れてはならない。社會が複雑體であると同様に國家も亦複合體であるから、従つて其の起原は決して單一の要因若くは條件のみでは解き得べくもないのであつて、初めは同族的の組織の中に集團の基礎が確立し、其の次に定住と服従を強制する戦捷者等の新しい様々な要素が加はりて、爰に國家が發展を遂ぐるに至つたものに相違ない。我國の歴史などを緝いても容易に此の間の消息を知ることが可能であらう。

本章の主要參考書

1. Blackmar & Gilin, "Outlines of Sociology", part two, chap. IV.

1. Cooley, "Social Organization," chap. III.

1. De Greef, "Introduction à la Sociologie", part, II.

1. Ellwood, "Sociology in its Psychological Aspects", PP. 140—142, 341—351.

1. Spencer, "Principles of Sociology" PP. 485—519.

1. Giddings, "Principles of Sociology", PP. 153—196.

1. #, "Descriptive & Historical Sociology", PP. 433—518.

1. #, "Elements of Sociology", chap. XVII—XVIII.

1. Ross, "Foundations of Sociology", chap. I.

1. Small & Vincent, "Introduction to the Study of Sociology", PP. 163—214.

1. Mo gan, "Ancient Society", chap. V.



1. Small, "General Sociology", P. 112.
1. Ward, "Outlines of Sociology", P. 278.
1. Parnelee, "The Science of Human Behavior", chap. XIX.
1. Dealey, J. Q. , "The Family in Its Sociological Aspects".
1. DeCoulanges, "Ancient City", PP. 49—153.
1. Parsons, E, C. , "The Family".
- 1 Starcke, C. N. "La Famille primitive".
1. Bluntschli, "Theory of the State".
1. Wilson, W. , "The State", PP. 1—13.
1. Willoughby, "The Nature of the State".
1. Commons, J. R. "A Sociological View of  
Sovereignty", (American Journal of

Sociology, vol. V. PP. 1—15, 115—117, 347—366, 544—  
552, 683—695, 814—826; Vol. VI, PP. 67—89.

1. Leroy-Beaulieu, "The Modern State".



## 第五編

## 第一章 社會精神

## 第一節 兩極端說

社會に於ける心理的生活若くは精神に關しては二つの極端な見解がある。即ち其の一つはフーナー・ファイトなどに支持されてゐるような個々の人々の精神若くは意識を以て、決して互に有機的に關係されてはゐない云はゞ全然別箇な獨自的分離した或物であるとする個人主義的の見解であつて、此の見解は實際の所る今日の科學的證明には到底堪ゆべくもない十八世紀並に十九世紀の心理學の見解ではあるが、併し現今に於ても前にも言へるやうに尙ほ一部學者の間に支持者がないでもない。

けれども元來個人の精神はクレーレーやエルウッドなど現今一流の社會學者の主張するやうに、大きな全體の一部に過ぎないものであつて決して孤獨的なものではない。と云ふのは個人意識の内容は一方に於て多く遺傳若くは物質的生活機能から由來するものではあつても、而も尙ほ他方に於ては同様に社會若くは社會的生活機能からも發生しないものではないからである。

他の極端説は個人精神を以て全く個人の外に存在する眞實の社會精神である云はゞ一種の超精神の一部に過ぎないとするものであつて、此の見解は個人意識以上に吾々は意識することは可能ないが、然し不思議な仕方では吾々の其の一部を成してゐる意識が別にあるとするものである。

が此の様な神秘説は少くとも予輩の知つてゐる限りでは固より現今何れの方面の社會學者にも支持されてはゐないやうである。けれども獨りヘンリー・マーシャル氏の如き心理學の大家が、縦へ試みの假説としてゝはあつても、苟



且にも之れを擁護してゐるのは吾等其の理由の那邊にあるかを知るに苦むものである。

## 第二節 社會精神の本質

實際を言ふと社會精神は是等二極端説の中間に存するものであつて、其れは全然個人的孤立的のものではないと同時に、又純然たる超越的乃至は神秘的のものでもない。

と云ふのは元來精神なるものは個人的と社會的との二つの方面を持つてゐるから、個人精神と雖も決して純然たる個人的孤立的のものではなくて、却つて其の大部分は社會的成果であるにも拘らず、而も意識的經驗の中心は單に個人のみであるから、共通の生活作用を進め行く諸個人の集團たる社會は單に其の成員たる諸個人を通してのみ考へたり感じたり或は意志したりす

ることが可能からである。

言葉を換へて云ふと社會は多くの個人心理的單位が、相互に作用して總えず相互に影響し制限することから生じた合成的の統一體に外ならないから、吾々が社會の中に見出す唯一の統一は、即ち之を作用の統一と稱するの外はないとした所で、是れは要するに個人精神の神相互刺戟と反應とから生じた精神的の結果に過ぎないから、決して之れを超越的の自我イゴなどと稱すべきものではないと同時に、又純然たる個人的單獨のものでもない。

而して是等の精神的成果は共同生活の中で接觸する諸個人精神の思想や情操や感情やの統一とい、並に感情や思想や目的やの齟齬とに發現するものであつて、此の様な社會精神の成果を通俗的には公衆の意志即ち民意とか或は輿論などと稱するのである。何れにしても諸々の個人精神を包括せる獨立した大きな精神と云ふものはないけれども、各々の分離した精神間に何等かの關



係がありて、人々の思惟したり感じたり乃至は意志したりすることを制約し且つは多くの場合一定の行動に彼等を強要することがある。

此の様な精神は一致の行動に依りて發現さるゝものであつて、其れが一たび發展して組織されると、即て社會の現在執意の上に經驗的智識の資本を加へて、社會精神をして堅固にして且つ不變ならしめ、斯くて吾々をして社會精神を恰も個人精神と同様に、分離した別箇のものゝやうに威壓的に感せしむるに至るものであるけれども、クレーレーも言つてゐるやうに元來精神に社會精神と個人精神との二種類がある譯ではなく、吾々が社會精神を研究する場合は普通心理學の狹隘な方面や關係やよりは、一層大きな方面と關係とに吾々の注意を向ける謂に外ならぬ。

社會精神の場合に於て形成の仕方若くはギツデイキングスの所謂「完成」の仕方は、個人精神を作成する仕方と全く同様ではあるが、併し社會精神は

一つの有機體の——個人の場合では腦髓の——活動からは發生しないで、却つて社會てふ一つの組織體或は體制の活動から發生する。

従つて其の連絡も有機的の連絡——即ち神經——ではなく却つて組織立つた交通系統のそれであつて、例へば一地方の住民に大火とか洪水とかの大きな災難が不時に見舞つた場合、其れを耳にした凡ゆる人は悉く驚愕に襲はれる如き即ち其の一例である。

驚駭の感じは單り罹災者ばかりでなく苟も彼等に同情を持つた何人にも共同的に起るべきであつて、其の次に生命の喪失とか財産の損害などが想うたよりも更に多大であることが解つてくると、驚愕の感じは一層酷しくなりて罹災者に對する同情は増々普遍的となり、斯くて全部落は恰も一人なるかのやうに感ずるものである。

同情心に次いで現はれるものは罹災者を救濟しようとの提案であつて、是



れについて様々な意見が分れるが、結局は公會堂で討議した上で何等かの最良な方法に輿論が一致して來るに違ひないから、詰まり此の様な共通思想が其部落の大多數に分擔さるゝに至つた譯である。それから此の意志を實行するために役員を選定したり委員を任命したりして、所期の救済を仕遂げるために資金を募り、斯くして社會精神は個々の人々の感情や思想や目的やの中で形成され若くは完成され、復た斯くして社會行動が作出さるゝのであつた。

然るに之れに反し其の際若しも違つた感情が人々の間に起り、或は異つた思想が其の方法に關して現はれたならば、然らば其の時は彼の様な最後の結果は勿論永遠に見ることか可能なかつたかも知れぬ。要するに發表された一切の意見は悉く總體の考慮の中に這入り、斯くして最後の決意の基礎となるものではあるけれども、左ればと云ふて其の各々の意見は復た他の感情や若くは意見やの勢力で影響されないものでもない。

それで社會精神は云はゞ幾多個人精神の組織され體制されたものに外ならぬのであつて、其れの成果は即ち諸個人の感情や思想やの組織體に過ぎない。けれども人々の思想——況して其れが一層成熟し熟慮したものであるに於ては尙更ら——の刺戟は又社會精神を一層深くし且つ強めないものでもない。と云ふのは人の目的は同様な感情や思想や目的やが他の人々にも抱かれてゐるとの共通的の意識のために増々頑強に支持されるものであるからである。

### 第三節 社會精神の發生階段

社會精神の形成され若くは組成さるゝ所以の道程を左の如く一層精密に分析することが可能よう。

(イ) 刺戟と反應、——社會精神を形造る第一階段は或種の刺戟と其れに對する集團の成員たる諸個人の反應とであつて、常住に諸々の個人の上に働い



て個人的並に社會的の活動を起させるのは、周圍の物理世界即ち寒さとか熱さとか春夏秋冬の時候とか晝とか夜とかの刺戟である。之れに加ふるに他の人々の存在並に活動等の與ふる刺戟、詳しくは同じ集團の刺戟と他の集團の其れ等があり、最後に他の人々の思想や理想や乃至は感情やで惹き起さるゝ精神的並に肉體的活動への刺戟もある。

(ロ) 刺戟の結果として類似と相異が現はれる、——總て是等の刺戟は刺戟された個人の側から云ふと、必ずしも同じ種類の反應を惹き起すものとは限らぬのであつて、即ち彼等の或人達は同様に行動するが他の人々は左様でない。それで同様な反應のために自然に一樣に行動したり感じたり思惟したりする人々は一つの集團を形造るけれども、同一刺戟に對し異つた反應を爲す人々は必ずしも左様はしない。

が、時とすると總て是等の人々は縦、第一の集團よりは違つて行動しても、

第二の集團を形成して其の中で一樣に行動したり感じたり乃至は思惟したりする場合がないでもない。けれども勿論是等の何れの集團よりも尙ほ異つて反應する人々が更に無いとは限らぬのであつて、即ち社會精神を組成する幾多の活動や感情や而して思想やに變差が生ずるのは、要するに反應に於ける此の様な相異に基づくものに外ならぬ。斯くして精神や性格やに様々の類型が形造られ、又斯くして人々は其の相異と類似とに依りて分離もしたり結合もしたりするのである。

(ハ) 類似と相異の相互的意識、——社會精神は集團中の一切の人々の相互關係に於て、一部の人々は互に類似してゐるが他の人々は左様ではないと云ふ事實が、互に意識さるゝほどに發展するまでは形造らるゝものでない。而して類同と不同との此の様な意識は、固より集團中の總ての人々に同じ程度で分擔さるゝものでないことは云ふまでもないが、而し集團中の或人々が一樣



に行動したり感じたり又は思惟もしたりするに反し、他の人々は左様でない  
と云ふ意識——それも或人には明確に認められるが他の人には極めて臆ろげ  
に——は集團を通じて存在するものである。

斯くの如き縮圖は未だ曾つて互に知らなかつた兒童等が、集合する場合に  
何時でも容易に観察し得るものであつて、最初は隔意と用心とで互に他を綿  
密に観察し合うてゐるが、其の次になつて各々が一時其の集團中の或人々を  
好きになり、而して他の人々を嫌ひになるやうな心持になり、即ち其の様な  
心持を一番初めに抱いた兒童が、最初に好きな他の兒童に近づいて遊戯をや  
らうと申込むものである。

さうして其の申込みを若しも他の兒童が承諾すれば其所で集團の固めの一  
歩は始まる譯であるが、進戯の進行中に其の固めは更に以上に進まないもの  
でもないけれども、之れと同時に又淘汰作用も行はれるものであつて、即ち

類似と相異とが新しく發見されて人格の新しい角が觀察されると、新しい精  
神上の整理も出來て最初の反感も今は多分に和らげられ、斯くして次第に多  
く似通ふやうになる社會化の作用が起るものである。

更に社會的交際の交渉妥協に依りて、類似の點が協力を欲せしめるまでに  
彌々多く發見され、従つて集團の諸成員は何等の衝突もなく、一緒に遊ぶこ  
とが可能るまでに調和するやうになり、かくて子供達は單に同様な趣味や感  
情や理想や功名心やを見出したり發現したりするのみならず、又實に彼等が  
同類であることを意識するやうになるものである。が多くの異つた地方から  
一つの新しい土地に集まつて來て、互に團結し始める人々の間に發生する社  
會精神の發達は毫も之れと異なる所がない。

(二) 共通目的が發現する、——既に一たび集團が類似と相異——勿論前者  
は後者よりも一層大きく——とを意識し、復た集團中の諸成員によりて一た



び共通的の情操や感情や思想やが、意識的に抱持され且つ享樂さるゝに至ると、是れで社會精神の發現の動的條件は具備した譯であつて、端的に云ふと其れは既に形成されて將に活動しようとしてゐる状態にあるものと云はなければならぬ。

換言すれば共通的の感情や情操やを意識的に抱懷してゐることは、即て或方向に向けられた共通的の目的を支持せしむる所以であつて、斯くして輿論は形成され、公的感情は喚起され、又斯くして公的意志も發現することが可能なるものである。

多くの場合一つの社會と他の社會との間に争鬭などが起るのは、主として此の様な幾多の階段を経て初めて最後の行動即ち干戈に訴へるやうになるものであつて、初めに共通的の感情や思想や意見やが先づ道を拓き、然る後此に公的意志の活動を見るに至るものである。日清戦争や日露戦争も斯くして

起り、今次の歐洲大戰の發生も亦多く此の選に漏れない。

#### 第四節 社會意識

社會意識を以て個人意識以上に存するものとする神秘的見解は姑く差置くとしても、尙ほ此の成語には二種の異つた道理ある意味が含まれてゐるやうであつて、第一は此の語を單に個人意識の一方面のみを意味せしめるものであるが、然し實際上總ての個人意識は皆な社會的に制約されて、社會的目的の方に働くものであつて見れば、此の見地から云うと吾々が社會の中に見る凡ての意識は事實上皆な社會的であると云はなければならぬ。

即ち一切の意識は個人的と社會的との二つの方面を持つてゐて、是等の二方面は様々な仕方で相互に關係してゐるものであるから、クレーの云つてゐるやうに「社會を知つてゐる」との意味での社會意識は、自我意識と決して



分つことの出来ないものである。と云ふのは或種の社會的集團に關係せしめないでは、吾々は自らを考ふることが出来ないからであつて、即ち此の意味で社會意識は個人意識と全く相關的のものではあるが、併し他の人々の意識並に彼等の活動に對する自らの活動の關係の意識は、多くの個人的精神を包含せる協力的の活動となるものであるから、一層高い様式を採るものであることは固より云ふまでもない。

此に於てか吾々は更に社會意識の第二の意味を解かなければならぬのであつて、其れは一定の社會的集團の各々の個人の立場から云ふた社會連帶の意識若くは一般的の知覺の謂に外ならぬ。語を換へば其れは集團中の各々の個人が集團全體の活動に對する自らの活動の關係を意識する一種の社會状態に外ならぬから、エルウッドも云つてゐるやうに是れは寧ろ社會的自我意識の状態と呼んで然るべきものであるやも知れぬ。

其れは又自らに對する個人の意識と他の人々に對する自らの意識との兩つながらを一層強めたものでもあつて、一切の意識が活動を調停するため存するやうに、斯くの如き意識の状態は云ふまでもなく特に社會活動の複雑なものを調停する働きをなすものに相違ないから、即ち斯くの如き條件の下で一集團の諸成員の活動が、低級な意識の條件の下でよりは一層精確に齊整されることが可能なのである。

此の様な意味での社會意識は、主として社會進化の極めて複雑な段階を特標するものであつて、即ち全社會が自らの安寧若くは不安の如何なるものであるやを意識し得る状態にまで發達すると、其の社會は立法とか警察制度とか並に教育等の如き極めて用意周到に考案した方法に依りて、社會行動の一般方進を形造らうとするものである。

ドウ・グレイフの言うてゐるやうに、經濟上の生産とか分配とか並に種族の



永續とかと關係する殆ど凡ゆる人間の欲求は、悉く社會事情を意識することに由り發生したものであつて見れば、即ち社會意識に基づく活動は、主として廣義に於ける社會の規制に關係する活動と社會の教育に關する其れとに外ならぬと云うても決して過言ではないであらう。

社會意識の働きを説明するために更に兒童の生長に例を採らう。云ふまでもなく彼れは食事を攝るが、其れは單に腹が減つたから攝るのであつて、成人に生長するために攝るのでは勿論ない。復た遊戯を爲す時でも單に娛樂の欲望を満足させんためからであつて、決して自分の肉體とか若くは能力とかを發達させやうとの欲望からではない。

が彼れでも何時かは肉體を練つたり精神を開發させたりする必要を感じる時節が到來するに相違ない、さうして其の時には自らの生活を特定の目的のために或方面へ強要しようとするに違ひない。即ち彼れは自らの性格を變ず

るために智識を欲求することもあらう、又自分の習性が感心出來ないものであることを知つて是れを何とかして修正しようとすることもあらう。斯くて教師の助力や乃至は實世間との接觸やに依り、自らの意志の意識的努力で自らの生活を改造しようとするものである。

が社會も亦之れと同様に、初めは罪人を懲罰したり姦通者を處刑したり、或は集團の傳統を子孫に傳へるために、様々な儀式などを作つたりして共通的に幾多の行動を實行する事があるが、然し是等の行動は必ずしも社會を建設したり變化したり若くは改善したりするために行はるゝものではない。けれども時期が來ると社會は應て自らと並に自らの境遇とを知るやうになるものであつて、社會生活の改造問題とか或は既に存在してゐるものを變化しようとする意識的努力などが發生するのは即ち此の時でなければならぬ。按うに社會改造の聲が世界的に叫ばるゝ現代の如きは、正しく世界的の社會意識



が其の高潮に達せる證左ではなからうか。

### 第五節 輿論

輿論など云ふ言葉は人により其の用法區々まちまちであつて、之に一定の定義を附することはナカクに難かしい。或人は之れを以て一社會中の總ゆる人が一致する意見の謂であるとし、ルウソアの如きは之れを一般意志 *volonté générale* の意に解し、又たハノタウは之れを社會體の本心コンシエンスであるとなし、更に政治方面では之れを新聞や雜誌並に選舉人やの意見と同一視する場合さへ少くはない。

が孰れにしても甚しく動的である社會は、其の社會的活動を所謂輿論なるもので統制する必要があるのであつて、之れに反し野蠻未開の社會には社會的傳統はあるけれども輿論なるものは殆ど之れを見出すに由ない。

元來輿論は多くの人々の意見の相互の作用並に反應によりて、形成された多少なり合理的な集合的判斷を意味するものであつて、恰も個人の意見が個人生活に作用するやうに、此の様な集合的の意見は又集團を動かす作用をなすものであるから、そこで新しい活動や習性を築き上げるために、個人が多少なり合理的な意見若くは判斷を形作らなければならぬと同様に、復た社會活動の何等かの實際的方進に着手するに先だち、一般に人々の集團は豫め或種の集合的にして且つ意認的の意見を得なければならぬものである。それでないに社會活動は決して意識によりて調停さるゝことは可能ない。

クローレーが其の著「社會體制論」中で強調してゐるやうに、輿論は必ずしも意見の一般的の一致を必要としない。要は人々の意見に或程度ニオルゲネーションの齊整ニオルゲネーションがあり組織があれば足りるのであるから、輿論たるには決して絶對的の同意とか若くは一致を得る必要はなく、單に人々の意見と判斷とに組織があれば



可なるのである。

従つて一部の社會學者や社會心理學者等が、多くの場合主張してゐるやうに、輿論は敢て必ずしも社會の最下級の諸成員全體によつて納得された判断を代表する必要はなく、却つて社會の指導者や識者や——是等が其の社會を反影した後で——の成熟した意見を代表すれば宜しいのであつて、輿論は單に活動を齊整する働きをするものである限り、即ち活動の其の様な齊整を確保するためには、必ずしも絶對的の一致は必要でなく、却つて輿論を形成する種々な要素の間に調和的の主潮さへ見えれば其れで宜しいのである。

即ち何等かの新しい社會的齊整を、誘起する作用をなす交通と交互的影響との協力的の成果として、換言すれば個々の人々の判断の組織として、輿論を見做す事は確に妥當な見解であつて、史家ニービュールが輿論に關して「人々の相違とか並に彼等の居る地位や境遇やの甚しい相違とかにも拘らず、恰

も普遍的の眞理とか道理とかの發現でもあるかのやう、酷しきは神そのもの意志でもあるかのやう、單に一人／＼が反復するのみならず却つて異口同音に表現れる意見の謂である」としてゐるのは、餘りに事實と遠ざかつたものと云はなければならぬ。

### 第六節 輿論の發達

社會生活に於ける重大な要因若くは器具としての輿論の發達が、主として相互交通乃至は刺戟と反應との自由に基づくものであることは云ふまでもないことであつて、即ち言論の自由や公的批評の自由や出版の自由、討議の自由等がなければ輿論は高度に發達することが可能ない。

と云ふのは前でも述べたやうに輿論は元來多くの人々の判断の作用並に反應によりて形造られるものであるからであつて、ギッディングスが最高種類



の輿論即ち合理的輿論の發達を以て、討議の自由や言論の自由並に集會の自由等に歸すべきものであるとしてゐるのは蓋し最も當を得たものであらう。更に彼れが是等言論の自由や討議の自由並に集會の自自等の沮まれてゐる社會には、眞の輿論なるものはあり得ないと言つてゐる事も確に眞理であつて、即ち斯くの如き境遇の下では輿論は決して其の最高にして充分な發達を遂げることは可能ないのである。

けれども出版の檢閲嚴重を極め且つ集會の自由殆ど沮止されてゐる國々に於ても、尙ほ諸個人間に社會的の相互交通の手段は多々あるものであつて、縦へ餘り合理的の形式でははなくても、相互交通は單なる暗示作用のみでも行はるゝものであつて見れば、如何ほど相互交通の道が遮止されたからとは云ふても——固より充分の合理性を帯びないものではあるにもせよ——必ずしも眞の輿論が形成されない筈はない。

按ふに輿論の此の様な状態は、革命以前の佛蘭西や又露西亞などにも存したやうであつて、固より此の種の輿論は合理性の極めて低級なものであり、且つ社會的變化を仕遂げるに至つて微力なものであるには相違ないが、其れが公然たる輿論となるに至らないだけそれだけ、其の暗流と底力とは更に一層深刻であり且つ兇猛なものと云はなければならぬ。

と云ふのは輿論は何時も多くの人々の判断の協調を意味し、従つて集合的の行動を支配しようとの多少合理的の努力を表はすからであつて、此の見地から云ふと社會に輿論の機能を充分に果たさしめることは、之れ旋て亂暴にして革命的な社會變化を制遏する所以の方法でなければならぬ。

であるから苟も相互交通の手段を遮止することは、之れ一方に於て輿論の正當な發達を遮止する所以であると共に、又他方に於ては結局社會生活そのものの健全にして合理的な發達をも遮止する所以であることを知らなければ



ならぬ。

### 第七節 輿論の社會的機能

輿論の社會的機能は或種の社會的活動から他の種への過渡を調停するにあることは既に前でも一言した通りであるが、其れは實に社會に於ける新しい協調を仕遂げるために缺くべからざる一種の淘汰作用であつて、此の點から云ふと輿論は高い様式の社會生活を調整する絶好の手段とも稱することが可能であらう。

従つて風俗とか法律とか其他多くの社會制度等は主として社會發達の後期に於ける輿論に基づくものではあるけれども、左ればと云うて法律や習慣や民俗やの起原を悉く原始的社會の輿論に歸せようとするのは固より謬見であつて、是等のものは多くの場合却つて或種の本能的の反應若くは偶然的の調

整から發生したものに相違ない。が社會發達の後期特に自由社會に於ては、輿論は總ての風俗や法律や制度等に酷しい影響を與へないものでもない。

であるから社會發達の後期に於ては、社會秩序は多少なり輿論に制せられやうとするものであつて、特に自由社會に於ては一切の風俗とか法律とか制度などは、凡て輿論の統制の下に置かれようとする傾向あるものである。即ち斯くの如き社會に於ては政治なども多くは輿論に基づくものである以上、輿論は實に社會統制の主要な機關ではあるけれども、果して如何なる程度に於て其れが社會統制の手段となつてゐるかは、固より第二義的の問題であるから敢て爰で論及するまでもなからう。

が輿論の機能を論述するに當り特に看却すべからざる重要な事實は、一切の社會的規制並に統制に對して演ずる輿論の役目の増々重加する點であつて一見すれば政治や法律やでは到底仕遂げることの不可能な事柄をさへ、其れ



は能く仕遂げ得るものゝやうに想はれるのである。

例へば社會に合理的の結婚を行はしめようとしても、其れは立法や政治やなどでは到底如何ともすることの不可能な事柄に違ひない。が然るに今若し之れに關する有力な輿論が提起され、斯くして多くの人々が之れを支持し其の妥當なことを信するに至つたならば、聽て其れは社會化して結婚制度の合理的の規定となるに相違ない。

従つて人々の一層合理的な判断を輿論で發現させるやうに討議の自由を持つことさへ可能れば、社會生活に於ける増々多くの事柄を輿論の支配の下に置くことは洵に望ましいことであつて、斯くて現在吾々の目前に横はつてゐる多くの重大な社會問題等も、之れを合理的の輿論の發達によりて、恰て利刀の亂麻を斷つがやう明快に解決することが可能であらう。

輿論にして既に現代社會の調整に斯くの如き重大な役目を果たすものであ

るならば、然らば輿論を指導する機關が社會的に重要であるのは又固より云ふまでもないことであつて、社會が一層複雑となるに従ひ輿論の指導並に形成は主として印刷物の職分に歸し、教壇や演壇や而して集會やは次第に其の重大さを失はうとしてゐる觀のあるのは、單り我國のみの現象ではなからうと思ふ。現にエッウッド氏なども米國に關して同様な推斷を下してゐるのである。

之れを同時に刊行物——單り新聞紙のみと云はず雜誌も亦書籍をも包括した——が輿論の指導並に形成に重大な要因となるに伴れ、其れが今日では多く營利的基礎の上に立つてゐて、多くの場合社會的の要求に應ずるよりは寧ろ個人的の目的に役立たしめるために取扱はれてゐるのは眞に注目すべき事柄であつて、今若し吾々が社會に於ける多くの統制や規定やを悉く輿論の儘に放任するとしたならば、然らば其の時は社會は其の合理的な發達のために



一切の刊行物を社會の利益になるやうに支配し監督する必要あるものでなければならぬ。

が是れには固より慎重な態度と該博な社會學的智識と而して公平にして鋭敏な道德心とを要するものであつて、一步を過かまれば却て社會の獨創と進歩とを阻碍し、延ひては豫期せせる極端な變革の禍因とならないものでもないから、識者の深く用心しなければならぬ點であらう。特に我國現代の爲政家達は此の點に深く思ひを潜めなければならぬ必要あるものではなからうか。

### 第八節 民意

個人の判斷が結局は個人の行動となつて終るやうに、社會的の意見となる社會的の判斷は詰る所又集合的行動に終らなければならぬものであつて、即ち公衆の討議並に輿論の形成等によりて達成された諸々の決意を吾々は民意

若くは社會意志など呼ぶのである。

民意は云はゞ一定の方向に集團の活動を協調させることに外ならないから社會意識や輿論やと同様に、其れは一集團の幾多の活動を組織し協調させて所詮は統一された一つの結果を仕遂げようとするものに外ならないのであつて、集合的の生活を營む集團の全作用は固より意志若くは活動の作用には違ひないが、併し其の様な活動が果して何れほどまでに社會意識と輿論とに調停されてゐるかは固より社會進化の程度如何に由るものでなければならぬ。

けれども明確な社會的選擇と決意とが特に顯著となつてくるのは單に高等な種類の社會に於てのみであつて、團體意志に固より最初から團體生活の不可分のな附隨物ではあるが、然し近代の民意なるものは全く新しい物でもあるかのやうに甚しく意識的となつてゐるから、或意味に於ては社會的自我意識と輿論とによりて的確に調停され且つ支配されてゐる團體行動は、本能



や風俗や或は傳統やで調停されてゐる社會行動とは全然別物なるかのやうな観ないでもない。

であるから熟慮的の社會選擇てふ此の様な高い意味での民意は、社會的自我意識や輿論やと同様に、社會發達の割合に後期の成果として見做すべきものであつて、現代の文明社會に事實用心深い思慮によりて不節制な感情を抑遏したり、又熟考によりて妄動を拘束したりしようとする傾きのあるのは、職として民意を一層高くして且つ合理的な基礎の上に置かうとする理智の賜に外ならぬのである。

#### 本章の主要参考書

1. Cooley, "Social Organization", chaps. I & II.
1. Davis, "Psychological Interpretations of Society", chap. V.

1. Blackmar & Gillin, "Outlines of Sociology", part. III, chaps. VI & V.
1. DeGreef, "Introduction à la Sociologie", chap. XIII.
1. Durkheim, "Les règles de la méthode sociologique", PP. 6—23.
1. Farbanks, "Introduction to Sociology", PP. 76—91.
1. Giddings, "Principles of Sociology", PP. 132—152.
1. Small & Vincent, "Introduction to the  
History of Society", PP. 215—236, 207-221.
1. Tardus, "La logique sociale", PP. 92—204.
1. Warde, "Pure Sociology", PP. 150—159.
1. //, "Dynamic Sociology", PP. 400—469.
1. //, "Psychic Factors of Civilization", PP. 291—312.
1. Le Bon, "The Crowd",



1. Ellwood, "Sociology in its Psychological Aspects", chap. XV.
1. Fife, "Individualism".
1. Marshall, H. R.—"Instinct & Reason". PP. 65—77.
1. /, "Consciousness", PP. 173—80.
1. Giddings, "Descriptive & Historical Sociology", PP. 124—423.
1. /, "Elements of Sociology", chap. XII.
1. Shepard, W. J.—"Public Opinion", (The American Journal of Sociology", vol. XV, No. I.).
1. Lalor, "Cyclopedia of Political Science", vol. III, P. 480.

## 第二章 社會秩序

### 總說

オーグスト・コムトは社會秩序てふ語を極めて廣義に解し、社會學の問題を主として社會秩序と社會進歩との二者に分ち、社會靜學は専ら前者を取扱ひ而して社會動學は後者を論究するものとしてゐる。

既に「社會學の題目と問題」中でも述べたやうに、大體に於て其れは固より何人も異議を挟み得るものでないにした所で、然し現今に於ける社會學の發達は讀者をして單に其の様な漠然とした釋義のみでは到底満足せしめ得べくもないから、吾は其れに對し更に精細な説明を與へなければならぬ。

一部の人々は社會秩序と社會組織とを恰も異語同義でもあるかのやう考へてゐる者もないではないが、是れとても嚴密に云ふと決して精確なものでは



ない。と云ふのは後者の主に社會的集團の諸要素の關係若くは條件を意味するものであるに對し、前者は諸個人間若くは社會の諸部分間の固定し且つ調和せる關係せる關係を表示する語であるからであつて、其の點から云ふと其れは又社會連帶とか社會統一とか若くは社會連續など云ふ語とも本質上必ずしも同一視すべきものではない。

が、社會組織を形造つたり或は社會連帶に影響したりする要因の一切は、多少なり人々の間に固定し調和した關係を誘發する條件たり得ないものでもないから、従つて人々の固定し調和した關係に過ぎない社會秩序は、多くの場合本能や習性や傳統や模倣や而して同情やに依りて影響されないものでもない。

そこで譬へば人間以下の下等動物の社會生活に存するやうな社會秩序は、多くは地理的境遇であるとか生物的素質即ち本能とか習性などの作用の成果

に外ならぬものであるが、同様な諸作因は人間の集團に調和的の協調を誘起するにも亦有力な勢力であるに相違ない。即ち野蠻人などの集團に於ける固定した調和的關係は、多くは習慣とか傳統とか民俗など——是等は勿論習得した習性の諸様式に過ぎない——稱するものゝ結果に外ならないが、然し一切の人間社會には下等動物社會に絶えてない或物がありて、社會秩序を維持しようとしてゐることも亦確に事實である。而して其れは云ふまでもなく規制的制度に出來上つてゐる社會統制てふ意識的方法に外ならぬ。

更に詳しく云ふと一切の人間社會には個人を強制し、且つ支配するためには多少なり意識的熟考的方法が用ゐられてゐるのであつて、是等の方法は幾多の活動様式に組織せられて更に全體としての社會に反射し、且つ多少なり社會によりて意識的に承認されてゐるものであるから、従つて人間社會の社會秩序は單に本能や習性や同情や而して模倣等から發生した自然的自發的の



秩序ではなく、又或意味では寧ろ全く人爲的のものであることを知らなければならぬ。

### 第一節 社會秩序と社會統制

社會の進化するにつれ社會生活は増々複雑となるから、従つて諸個人間に諸階級間の争闘を回避して、社會の一切活動間に固定した調和ある關係を確立せしめるため、人々の性質や行爲やを統制する手段が増々必要となつて來るのは固より云ふまでもないことであつて、特に文明社會では或種の高い社會秩序を保持するため規制的諸制度の能率を増加する必要が彌々大切となつてくるのである。

が、個人の性格や行爲やを徒らに監督し統制することは、動もすれば、あたりにまへの社會變化をすら沮止し、斯くて社會の進歩を妨遏しないものでもない。

而已ならず、個人をして自らの行動に對する束縛に何等本能的の反抗も反對をも起させないで、只管自らの習性を社會的の要求に應せしめようとはかり焦心させるものであるから、従つて個人の考へたり感じたり且つ行動したりする習性は、全く彼れの社會の其等を模倣することのみとなりて、其のみに獨創性を失ひ延いて社會全體の進歩を沮止すること決して尠くない。

社會統制は固より大切なものには違ひないが、同時に個人の獨創性も亦重大なものであるから、苟も社會統制の事特に政治の實際に當らんほどの人は此の點に大に鑑みなければならぬのであつて、社會生活の増々複雑となるに従ひ、社會統制の或種の制度に對し往々破壊的の言動を試みる人々の増々多くならうとするのは、偶々彼等の獨創性の已むに已まれぬ反抗が、自ら發するものには外ならぬにしても、其のために社會統制の價值が毫も減ずるものではない。



即ち人間社會は最初から人々を訓練したり且つ行爲の標準を一致せしめたりするために、多少意識的努力を要するものであるから、苟も社會の秩序を維持することが必要である限り、社會生活が複雑となるに従ひ社會の個人を訓練したり統制したりする必要は、増しはしても減ずるものでは決してない。

而して少くとも過去に於て人々の關係を調和的に整理し調節し而して統制したのは、主として威力と政治法律と宗教と道德と而して教育の所謂規制的制度とであつたが、是等の諸制度の悉くは文明の高い現今の社會秩序を維持するにも同様に必要なものであるだらうかどうか。或は是等の中には今日では既に不用に歸してゐるものがないではあるまいか。更に彼等は如何にして社會秩序を保持するやう働くものであるか。以下節を追うて是等を簡單に論述しよう。

## 第二節 社會統制の機關としての威力

吾々が爰で威力と云つてゐるのは、主として人々の恐怖心に訴へて威壓的に彼等をして協調的の態度を採らしむる物質的乃至精神的の強制力の感じ、特に兵力や警察力や其他の實力等を意味するものであつて、其れは積極的に自分以上の力と協同して自己の生存を完うしようとするものであると同時に、消極的には危難から免れるために特に同類者と行動を共にしようとするものであるが、等しく社會的に自らを順應し陶冶して、社會の秩序を保持する所以の手段となるものであることは云ふまでもない。

であるから政治や法律や甚しきは宗教ですらも——是れは勿論超自然力の畏怖ではあるが——其の初めは多くは威力の感じから發生してゐることは、恐怖心が人類の社交性の一次的要因であるのを見ても瞭かであつて、現に今



日に於ても少くとも一部の人々にとり、政治や法律やが縦へ外面的ではありながらも尙ほ社會秩序の手段として効果を奏してゐるのは、多くの場合其の背後に或種の權力を豫想せしむるからに外ならぬ。

即ち一切の政治には常備兵が伴ひ、一切の法律には刑罰が随ひ、又一切の部落には警察が附いてゐるから、其の秩序は纔に維持され其の規律は辛うじて遵守されてゐるのであつて、若しも是等の制裁が無かつたならば其の秩序は到底永く保持さるべきものでない。是れは勿論主として未開の原始社會に適用さるべき言葉ではあるが、然し必ずしも左様ではないのであつて、今日の最も進んだ民衆政體に於てすら、尙ほ且つ政治の最後の手段が必ずや權力であるのを以ても蓋し思ひ半ばに過ぐるものあるであらう。

威力に依る統制は之を歴史的に探究すると其の由つて來る所は甚だ遠く、主として「<sup>マイト</sup>腕力は<sup>ライト</sup>權力である」てふ自然的の正義が行はれた原始社會に既に

其の著しい發達を見たのであつて、斯くて戦闘は何時も強者の特權と見做されて居つたのである。

即ち自らと自らの財産とを防禦し、若くは更に一層攻勢を採つて自分の權力や財産權やを擴大することの可能る個人は生存して繁昌し、然らざるものは滅亡するか、それとも大きな勢力を持った人に服従し隸屬することによつてのみ、辛うじて其の生存を完うすることが可能たのであつて、ギツデイングスが主權を解して「強制しようとする氣分と權力とを持ち、且つ民族中の一切の人々に服従を強制する個人、若くは人々の階級若くは全民族の謂である」としてゐるのは蓋し適言であらう。

種族の場合でも力若くは威力を持つたものが最も繁榮したのであつて、社會生活が一層複雑となるに従ひ、生存し得る力は應て支配し得る力と變遷し斯くて支配する民族と其の權力に服従する民族との二者に分化するに至つた



次第であるけれども、其の理由は個人の場合と毫も異なる所はなく、主として戦闘とか戦略とかによつて勝利を占めたものが、永く威力を以て其の被征服者の上に優勝の地位を獲得することに外ならぬ。

首長の如きも其の初めは強壯な體力とか非常な意力とか若くは並々ならぬ多智多策とかが其の主たる個人的資格であつて、傳統や威光や迷信やが其の後援をなし、更に宗教と戦争とが其の奴僕となつて働いたのであるが、次第に權力の加はるゝに従ひ、戦争とか會議とか若くは宗教上の儀式などで、彼れは能く自らの部族の利害を代表するやうな態度を敢てし、斯くて慣例とか法律等で認められる以前に早くも事實上の王となり、而して部族の利益のために人々を指導する間に何時しか又幾多の臣下をも有するようになつたのであかるら、縦へ理論上では人民は其の指導者や王をや選ぶ権利を保留するものであつても、而も實際は王が自分で選ばれるやうに仕向けたものと云は

なければならぬ。

是等の點を綜合して考ふれば威力が社會秩序の手段となつてゐるのは、今や一點疑ひを容るゝの餘地もないのであつて、理智の著しく發達せる現今に於てすら、尙ほ其の影響は決して輕視すべきでないにも拘らず、米國社會學界の一權威であるエルウッド氏の如きが、此の事に關し一言の論及する所ないのは、吾々の大に遺憾とする點である。實際を云ふと風俗とか傳統などが吾々を拘束するデュルケームの所謂「力」*Pouvoir*を持つてゐるのも、要するに其の背後に存する民衆の威力に外ならぬものであらう。

### 第三節 社會統制の機關としての政治と法律

或見地よりすると政治は人間社會の主なる規制的制度とも見做され得るのであつて、特に法律を施行する力としての政治は、凡ゆる文明社會に於ける



統制行爲の歸終とも稱することが可能よう。

平時に於ては單に統制の一手段に過ぎないものが、戰時になると政治は漸次其他の一切の規制的制度をも少くとも、或程度までは併呑しようとするものであつて、其れは又旋がて一切の社會活動をも吸引し且つ指導しようとする傾向あるものであるが、此様に政治の機能が擴大されて社會統制の系統が過度に集中することは、洵に危険なものと云はなければならぬ。が其の様なことは勿論滅多に實現するものではない。

政治と法律の消極的の機能は社會的抑制に存し、即ち或種の社會的の禁止を厲行せしむると同時に、其れを侵犯したるものには刑罰を課することであり、積極的には先づ社會内の秩序を確保すると共に、次に社會安寧を招徠するやう人々の活動を調和的に整理したり統合したりすることであるが、是れがために政治を警察力と同一視するのは誤解の甚しいものと云はなければならぬ。

らぬ。

政治と法律は確に諸個人や諸階級や、並に小さな諸制度やの上に立つてゐて、總てのために正義を確保して社會全體の安寧幸福を増進するやう、是等の一切のものゝ關係を、調制することを職能とする整理調節の機關ではあるが、如何ほど社會秩序を確保するために存するものであるとは云うても、亦た苟も社會の進歩を阻碍するものであつてはならぬのであつて、其の點から云うと特に近代に至り、社會的正義の機關としての政治と法律との能率が増々低下しようとする傾向のあるのは、吾々の大に着目しなければならぬ點であらう。

即ち其れは一切の集團が悉く利己的となりて自らを以て自らの目標と見做さうとする傾向から、一國家内での幾多階級間の調和的の秩序とか若くは國際間の調和的の世界秩序とかを確立するに、政治は動もすれば却つて有害な



ものとさへ從來思はれがちであつたと同時に、他方に於ては政治は事實他の一切の階級を犠牲にし若くは人類全體を犠牲に供して、單に一階級若くは一國家の主我的利益のみのために、政治を濫用したからに基づくものであつて、其のために人類社會の進歩が一方ならず沮碍されたことは固より云ふまでもない。

ノルマン・アンゼルの主張してゐるやうに、若しも戦争が何れの點から觀察しても人類の破壊的自滅的行爲であり、且つ社會を墮落に導くものであるならば、——固よりスタインメッツなどの唱へてゐるやうに戦争には又幾多の利益もないではないが——其の害毒は確に政治も亦た其の罪の一半を負ふべきものでなければならぬ。と云ふのは戦争は多くの場合集團的の癡見と政治の濫用とに基因するものであるからである。

一つの集團に忠誠であることは其の集團を包括してゐる大きな集團に忠誠

であることゝ必ずしも矛盾するものでないばかりか、却つて大に助勢するものでさへあるから、交通發達して社會的連帶が全世界を通じて普く行はれようとする現今に於ては、一國の政治は同様に須らく人類全體の生活を目標とするものでなければならぬ。でないとその政治は兎角合理性と普遍性とを失ふの結果、動もすれば自家撞着と自滅に陥らなければ已まぬであらう。

然るに其れが今日の様に漸次民衆化しようとする社會に於ては、苟も政治を純然たる階級心や國民的利己心以上に置かうとするには、先づ怎うあつても選舉人各自の理想を、單なる利己的、階級的若くは國家的感興以上に哺育しなければならぬから、理想的の政治は所詮教育とか宗教などのやうな他の社會統制手段を待つて仕遂げらるゝの外はない。

して觀れば社會の進化するに従ひ政治の必要は漸次減じてくるものであらうか。或は現今世界の隨所に叫ばるゝ政治を全然必要としないばかりか却つ



て人類の幸福安寧のために有害のものときへ見做す無政府主義者の理想は、果して社會進化の正當な目標と合致するものであらうか。是等の疑問に對する十九世紀の解答は多くは肯定的のものであつたが、苟も人類の社會生活の性質を正解するものは其の全然たる謬見であつたことを知るに決して困難でないであらう。

と云ふのは政治と法律とは、縦へ社會の進歩が續いて人々の性格が之れと歩調を揃へて發達するにしても、未來永却に其の必要を減じないばかりか却つて増々増大しようとする傾向さへあるからであつて、即ち社會が進化して社會生活を調節する必要が多くなるに従ひ、諸個人並に諸階級の行動を統制する必要も亦増々多くならなければならぬ譯であるからである。

が政治と法律は一切の人間社會にとつて必ずしも社會統制として十分なものではない。と云ふのは是等の爲す統制は主として外面的の行爲であつて、

人々の心事と、動機とか志向とかを統制することは固より不可能の事であるにも拘らず、偶々是等を統制しようとして却つて結局は社會的不幸を誘致しないものでもないからである。で政治と法律は之れを合理的に運用すれば社會統制の手段として確に有効なものに相違ないが、之れを補充するに更に宗教と道德と而して教育との三大作因を以てしななければならぬ。

#### 第四節 社會統制の機關としての宗教

宗教は行爲に超自然的の制裁を加へるものであるから、一切の時代一切の民族を通じて其れは從來力強い社會統制の手段であつた。凡そ人は自らの屬する集團の價值や標準やに酷しく行動が支配さるゝものであつて、宗教も亦其等の價值や標準やに普遍的の意味と嘉納とを與へて同様に人々の行動を支配する。即ち其の様な價值や標準やに普遍的にして且つ絶對的の眞實性を附



與することに由り、人々をして一層有効に社會的行動を統制せしむるから、そこで多くの宗教心理學者が云つてゐるように、宗教は本來社會的價值を宇宙へ投射するものであると云ふても必しも不當ではないであらう。

宗教は消極的には又一種の社會的抑制として現はれるものであつて、特に社會團體或は其の中の重なる階級の凡ゆる禁令や禁制やと結びついて、是等を侵す犯人をして超自然物の刑罰を怖れしむるものであるが、其れは要するに其の集團で安全と思はれ、若くは其の集團の安寧を誘發すべしと信せられてゐる行爲の習性を勢援する所以の方法に外ならない。

であるから宗教が一定の社會的秩序を維持するに、至つて重寶なものであることは夙くから認められ、斯くて一部の有力な階級の利益のために利用されるゝに至つたのであるが、其れが又多くの場合宗教をして社會進歩の阻碍たらしむると共に、兼ねて階級壓迫の機關たらしめないでもなかつた。けれど

も宗教を單に此の様な靜的若くは保守的方面からのみ觀察するのは決して當を得たものでない。

と云ふのは宇宙に對する鑑賞的若くは評價的態度としての宗教は、單に靜的の理想にばかりではなく又進歩的である理想や行動やにも等しく關心せしむるからであつて、按ふに理想主義的の一層高い様式の宗教が、單に現在の秩序を讚美するよりは一段高い意味で社會秩序の機械たらうとするのは蓋し自然の理であらう。

即ちそれは事物の現在秩序以上に道德的並に社會的理想に憧憬するものであるから、其の理想が保守的であれば宗教も保守的となりて社會進歩の邪魔物となるけれども、之れに反し社會的理想的價值が進歩的であれば、従つて宗教も亦進歩的となりて進歩的社會秩序の機關とならなければならぬ。と云ふのは道德的並に社會的理想は一般に家族のような人々の密接な關係から生



まれるものであるからであつて、宗教は前にも言へるように偶々以て斯くの如き社會生活の理想的價値を投射するものに外ならぬ。

宗教は進歩を讚美することは可能でも、其れを生むことは可能ないものである。が主として人々の愛他的の衝動や感情やを刺戟する宗教は云ふまでもなく社會進歩の基礎を据ゑるものであつて、宗教が人々の愛他的行爲を讚美すればするほど其れは人々の間の關係を調節して、正當な社會秩序の確立を保障するに與つて大に力あるものと云はなければならぬ。

然るに近來或は説をなして今後に於ける社會は最早や宗教を要せぬと主張する人が特に科學者の間に散見しないでもないが、其れは恰も一部の無政府主義者が政府を必要としないと同一理由で、心理學的並に社會學的理論としては決して當を得たものでない。

と云ふのは社會生活が一層複雑となるに従ひ政治と同様に宗教も亦社會秩

序のためにいよく必要となつてくるからであつて、其の上に社會的價値を強調する必要が増々大なる現今に於て、特に宗教の力に待たなければならぬ方面が多々存することを感ずるからである。

確に現代の最も重大な病的徵表の一つは、多くの人々の認めてゐるようには、有効な宗教的信仰の衰頹であつて、偶々信仰心があるかと思へば其れは全く愚にもつかぬ妖神邪宗の迷信で、動もすれば却つて社會の秩序を紊さん虞れないでもないから、そこで現今の社會的急務は正に現代の社會生活の要求に適應した即ち社會化された宗教或は人道を宗教單位とするの出現でなければならぬ。

开は從來のやうに民族的癖見の宗教、國民的自負の宗教、而して階級的誇譽の宗教であつてはならぬのであつて、却つて人類の生活を一つの連帶的全體——然り現代人は其れを意識してゐると否とに拘らず實に加速度で此の行



程を急ぎつつあることを知らなければならぬ——として見做し、且つ其の絶對的價値を讚美する人道主義的の宗教であらねばならぬ。

基督教でも將た佛教でも昨今は特に此の方面に向つて進んではあるようであるが、而も其の前途は尙ほ未だ甚だ遼遠であつて、今後更に一段の努力をしなければ彼等は漸次識者の唾棄する所とならぬとも限らぬ。今、彼等の共通の病弊を忌弾なく寸評すれば、共に餘りに古い過去の徹着いた教典の訓話のために心神枯凋して、其所には一點の現代生活と觸るべき清新な情火の炎々として世の疾患を熾き盡す底の熱血が流れてゐない點である。

是れでは宗教は早晚社會秩序を維持する其の機能を失ふて、社會は遂に精神的魑魅魍魎のために攪亂されぬとも限らない。

### 第五節 社會統制の機關としての道德

既に述べたるやうに、宗教の社會的價値は主として社會の道德的標準を支持するにあるから、従つて其れより推しても道德的標準や乃至理想やは人間社會に於ける社會統制の機關として缺くべからざるものであることが自ら瞭かな譯であつて、少くとも吾々の知つてゐる限り、何等かの承認された道德的標準とか若くは道德律などの上に基礎を置かない社會秩序なるものは未だ曾て人間社會に存在したことがない。

そこで風習とか社會的に認められた行爲の様式などは全く人間社會と共存するものであつて、エルウッド氏も云つてゐるやうに道德的平準と云ふことは所詮理想的平準に持ち上げられた社會的平準の謂に外ならないから、正當な道德的理想と云ひ又正當な道德的實行即ち德其のものと云ひ、要するに人の關係の調和を保證するものではなからうか。

ではあるが道德的理想と道德的或は社會的實行とは多くの場合別物であつ



て、是等を如何にして一致させるかは從來絶えず人間社會を惱ました問題の一つであつたのであるが、然し徳なるものは本來人々を調和的に結び付ける特質を有する事を認めさへすれば、即ち此の問題の幾分は既に解決されたも同然であらう。と云ふのは人々の間に苟も忠實とか正直とか誠意並に正義等の徳が存在しなければ、到底社會秩序なるものを期待することは可能ないからである。

で、道德律とか道德的標準など云ふものは多くは消極的の性質のもので、云はゞ社會的の禁止を意味するものではあつても、それでも尙ほ社會秩序の基礎となつてゐる點から云へば積極的とも見做され得るのであつて、復た是等の道德律や標準やが絶えず時代から時代へと變化し行くと云ふ事實も、要するに其等が社會秩序と密接な關係を有することを語るものでなければならぬ。

かるが故に社會生活が一層複雑となるに従ひ、道德も亦一層高等なものが必要となつてくるのであつて、比較的單純な生活境遇の下で生活してゐる人々には充分な徳でも、一層複雑な境遇の下では最早や役に立たなくなつて來ないものでもないから、道德的標準は文明の進むに従ひ絶えず一層高級な社會秩序を保持するように高めなければならぬものである。

然るにニチエーの如きは道德特に愛他的の道德を以て、却つて社會進歩を沮止するものであるとさへなしてゐるやうであるけれども、斯くの如き謬見は確に社會を由々しい混亂に導き陥れるの外はないのであつて、按ふに現代の社會的頹廢の最も重大な原因は、主として其の排道德的傾向に基づくものではなからうか。

總ての他の社會統制の機關と同様に、道德も亦人類の進歩する従ひ増々必要の度が加はりはしても減すべき謂はれは毫もないのであつて、此の際唯だ注



意すべきことは、道德は單に靜的保守的であつてはならぬのみならず、何時も變化する社會生活の境遇と、歩調を揃へて進まなければならぬと云ふ點である。

而して今日の急務は如何にして吾々の狭い階級的人種的而して國民的道德を推し除けて眞に人道的である道德に引き上げ、斯くして一切の區々たる集團的要求以上に人道的要求を最も價值あるものたらしむることであるけれども、其の様な階段にまで現代の有力な民族一般の道德的標準を擴大することは固より容易の業ではないが、然し現今のやうに行き詰つた社會的並に國際的紛擾を打解して、眞に合理的調和的の秩序と平和とを仕遂げるには、怎うあつても一切人類の連帶關係を原則とする完全に普遍的の道德を各人が精進して建設する外に方法とはない。

今日のやうに複雑な文化を維持し且つ普遍的の道德律を一般に承認させる

に適當な倫理系統を見出すことは、確に現時の差迫つた重大問題であるに相違ない。かの快樂説や自己修養説や十九世紀に於ける倫理思想の主なる流れではあつたが、前者の主として社會の保存よりは寧ろ自家の満足を大切とする所から、社會秩序に對しては却つて破壊的なものであるに對し、後者は著しく社會進歩の要求とは一致するが、兎角他人の幸福を無視しようとするものであるから、社會秩序のためには之れも決して完全なものでない。

偕て然らば如何なる倫理系統が果して最も好く最高級の社會秩序と一致したものであるだらうか。端的に言ふと其れは確に人々をして他人のために奉仕する場合にのみ自らの發展と幸福とを見出さしむると共に、且つ一切の個人や階級や國民や乃至は人種やをして、苟も爾餘の人類全體と離れては自らを目的とは決して見做してならぬとする所謂社會化された人道的の倫理の外にはあるべくもない。



即ち全人類を一つの單位と見做す斯くの如き倫理は、社會的見地から言ふても建設的であると同時に又総合的でもあつて、一方に於ては世界大の社會秩序と進歩とに關聯する一切の價值を保存させ發達させようとすると共に、他方に於ては人間の社會生活中の一切の恒久的價值ある諸要素を一つも除斥すまいとする。

詳しく云ふと其れは進歩的な社會生活の諸要求と一致した個人の發達を以て、上に述べた道德的社會理想を實現させる第一の條件とするものであるから、自己發展の理想をも包括せるものであると同時に、復た最も調和せる社會生活は單り快感によりて助勢される場合のみ保持されることが可能と見做すものであるから、必ずしも個人的幸福を道德的理想の一要素に數へないものではない。

それで吾々の要求する倫理は即ち此の様な人道的奉仕の倫理に外ならない

のであつて、人々が一たび相互に對する厚い同情と深い理解と愛他的の掉操とに鼓舞されて、個人と個人、階級と階級、國民と國民而して人種と人種とが其の古い惡夢から目覺めて、爰に親密な協調的關係を結ぶやうになると其れは纏て人々の最高の能率を發揮する所以であると共に、又最高の道德的並に社會的理想を達成する所以でもあらねばならぬ。而して其の様な境遇を誘致する方法は果して何であらうか、其れは云ふまでもなく社會教育そのものの力に待つの外はない。

#### 第六節 社會統制の機關としての教育

人間の性格中で遺傳に屬さない限りは主として少年時代又は青年時代に形成されるものであるから、そこで教育は社會統制の中で最も重大にして且つ究極的のものと云つても差支ない譯であつて、其れは主として發育する個人



の習性やら性格やらの形成に與つて大に力あるものに相違ない。

相當に施されると、教育は發育時代に於ける個人に人爲的環境特に正當な觀念や理想や標準や而して價值やの主觀的環境を與ふるものであつて、遺傳に悖らない程の方向に人々の性格を形造りて、威力や政治や法律や宗教や道德やの制裁以上に、成人となつてから後の幾多の困難な社會的境遇に身を處せしめるものである。

其の上に兎角靜的消極的にならうとする威力や政治や法律や宗教や將た道德やすらよりも、教育は一層進歩的な社會秩序を保持するために作用するものであつて、少くとも理論上で云ふと教育は現に存在する社會秩序と同様に、今後存在しようとする一層高い社會秩序にも容易に自らを適應し得るものに相違ない。

が、勿論其の様な教育は十九世紀の個人主義的教育とか或は現今の商品化

した教育などとは遙に選を異にしたものでなければならぬ筈であつて、直截に云うと其れは文明社會の一切の他の規制的制度と協力する全然社會化された教育であらなければならぬから、従つて特に政治や法律や宗教や而して道德やは教育を通じて初めて其の充分な社會秩序を維持する機能を發揮し得るものであらなければならぬと共に、教育は又是等の社會統制の諸機關を保存するために働かなければならぬものであるから、それで社會化された教育は社會統制の他の諸機關と決して別箇のものではなくして、却つて他の諸機關をして一層有効にその職能を果たさしむる一方法に過ぎないと云ふても必ずしも不當ではなからう。

現代の文明社會に於ける高い程度の社會秩序は、確に是等の六つの社會統制機關を最も有効に使用すべきものであるにも拘らず、然も未だ何れの文明國に於ても其れが左様でないのは、半ばは社會的の無頓着と無智にも基因す



るとしても、又半ばは是等の規制的制度に關する消極説が現代の文明社會に發達するに至つたにも由るものでなければならぬ。

而して其の様な消極學説は主として威力や政治や法律や宗教や道德や而して教育やの濫用から發生したものに外ならないから、苟も社會生活を科學的に研究せんほどの人は、是等の統制機關を最も善く吾々の社會生活の要求に適合するように指導しなければならぬ。が是等のものの多くは特に我國などでは果して合理的に有効に利用されてゐるであらうか、吾々は大に憾みなきを得ない。

別けても教育の如きは社會統制機關として我國などで最も輕視されてゐるもの、一つであつて、若しも或學者の云つたやうに教育並に教育家の尊重の程度如何を以て其の社會の文野を決すべき唯一の規準であるとするならば、遺憾ながら我國の如きは未だ眞の文明國とは稱することの不可能ない状態にあ

るものと云はなければならぬ。

是れには勿論幾多の原因もあらうかなけども、其の中の主なる理由は一方に於ては確に軍備擴張の急なる餘りに吾國の財政が他を顧みるの餘裕なきにも由らうけれど、他方に於ては現在の政治家の多くが唯だ眼前の外觀的な似而非業績を擧ぐるに是れ急であつて、國家百年の計を廻らす卓見先覺に乏しきにも基因するものに相違ない。

而して其の結果は外は列強の嫉視を買ふて増々軍備を嚴にしなければならぬ素因を作るに共に、内は現在若くは將來國民の素質を低下せしめて其の生産能率を減少し、従つて遂には文明國民としての資格をさへ喪失せしむる所以であるけれども、想ふて此所に至れば吾々は實に慄然として肌粟を生ぜざるを得ない。

文明なるものは云ふまでもなく、全然理智的に仕遂げられたものであつて



詳しく云ふと其れは自然法則に關する智識と、並に吾々が文化生活と呼んでゐる複雑な社會的調整をなさしめる所以の相互に對する人々の關係に關する智識との成果に外ならない。

即ち智識の累積と且つ智識の漸進的合理化とは、人々をして増々自然界を支配せしむると同時に、又自ちの性質をも統制せしめたのであつて、斯くて物質的文明の基本を成す様々な發明等も仕遂げられ、又斯くて精神的文化の本質を成す社會的行爲の諸標準や價值やの一層合理的にして高級な様式も達成さるゝに至つた所以であるけれども、其等をして最も有効に且つ最も急速に成就せしむるものは抑も何であらうか、其れは云ふまでもない即ち教育そのものでなければならぬ。

### 第七節 社會秩序と精神的 一致

固定した社會秩序は要するに人々の同心若くは類同精神に基礎を置かなければならぬとは、夙にギッテイツングスの強調した點であつたが、如何にも其の通りであつて、苟も或種の社會秩序が仕遂げらるゝならば人々の性質の一次的要素たる衝動と本能との間にも根本的の類同があり、習得した習性にも根本的の類似と一致があり、復た集團中の一切成員間に同情と相互理解もあるべき筈であつて、元來自然的自發的の社會秩序は人々の心的作用に於ける根本的の類同に由るの外はない。

が、一層複雑な社會になると生活の一層根本的な標準や理想やに關しても亦類似と一致がなければならぬものであつて、人々の間の高い種類の社會的協調は詮ずるに協同的思想や感情やに基因し且つ是等に依りて誘導さるゝの外はないから、従つて固定した高級の社會秩序は云ふまでもなく社會生活を分擔する諸個人の思想や理想や標準やの一致と類同に基づくものでなければ



ばならぬ。

けれどもギツドイツングスも亦充分に認めてゐるやうに、複雑な社會生活には人々の間に類似と同様に相異も亦必要なものであつて、即ち或種の相異は類似と同様に人々の間に調和的關係を誘起しないものでもない。今若し人々の思想や行動やに何等の相違もないものとしたならば、吾々の社會生活には何等の變態もなければ従つて又何等の進歩もない譯であつて、相異は單り社會進歩のためばかりでなく社會秩序にとつても大に價値あるものではあるが、併し其の相異たるや有機的の全體に互に補充的の意義を有する程度での相違であらなければならぬ。

と云ふのは人々の思想や標準やが互に餘りに懸け隔たつてゐると、其れは人々をして單に協力せしむる機會を失はしむるばかりでなく、所詮は争闘と不和をさへ惹起して苟も高級な社會秩序を維持し且つ發達させるに非常な阻

碍となるものであるからであつて、此の様な事實を力説した最初の社會學者は蓋しオーグスト・コムトであらう。

彼れは當時に於ける制度の不安定と社會的混亂とを以て、主として根本的の事柄に關する社會生活の不同に歸してゐるのであつて、純然たる社會秩序を達成する第一條件は根本的の公理<sup>マキシム</sup>を安定させることではなければならぬと言明してゐるのであるが、按ふに現代は彼れの時代に似通うた點がないであらうか。即ち其所には幾多の相争ふ勢力から脅かされる制度の絶えざる不安定はないであらうか。復た人々の思想や理想や標準やの葛藤から現代の社會秩序は少からず攪亂されてゐることはあるまいか。

危険思想などと言つた所で、其れは要するに無學にして無理解な政府者若くは其阿附者等が、不用意の間に捻出した用語に外ならぬのであつて、之れを學問的に分析すると其の中には社會の進歩並に安寧のために却つて有益な思



想もあるであらう。又勿論學理的には何等の根據もない従つて突拍子もない出鱈目な思想もないではなからう。が此の様な思想は固より他に類同の共鳴者あるべき譯もないから、従つて其れは到底社會的に勢力を得べき筈のものではない。縦しんば勢力を得たに於て、之れを鎮壓し統制するに徒に警察力等の威力に訴へるのは決して當を得たるものではないのであつて、斯くては其の様な妖怪な思想をして却つて増々其の存在理由を自認せしむる機會を與ふるものである。多くの場合矯激な思想——特に決鳴者のある時——は例へば言論抑遏等其他多くの社會的混亂や不秩序等に激發されたものに外ならなから、苟も社會の政治や統制やに忠實な當局者は先づ須らく其の禍因を芟除するやう努力し、其の後は主として思想は思想、意見は意見而して理想は理想の對抗と鬭争と勝敗と妥協と、そして最終の安定とに委ぬるを以て得策としなければならぬ。

而して人々の思想や意見や並に理想やの不同不一致を、事實と道理とに基づいて最後に決定するものは實に社會的智識の外にはないから、そこで斯學の智識に依りてすら尙ほ人生の價值とか理想とかに關する人々の意見に、何等の一致將た何時の統一も達成さるゝやうな見込みがないならば、然らば其の不和からは最早や一層高い調和的の社會秩序を期待することは不可能なであらう。

固より社會學は吾々の社會生活の理想や標準やに關する望ましい統一を仕遂げることは出来ないけれども、然し社會學上の眞理は威力や政治や法律や宗教や道徳や而して教育やの實際に適用し得るものではあつて、要するに社會學の役目は主として最も一般的にして且つ根本的な人々の關係に關する諸々の價值や標準やを確立するに在ると云ふても決して過言ではない。



## 第八節 社會秩序と社會爭鬭

グムプロツチの如きは爭鬭<sup>キヤウ</sup>を以て社會生活の常態としてゐるけれども、若しも此の語を以て人々の競争とか並に社會生活に於ける感興とか理想等の不同の外は意味さないものであるとすれば、即ち其の様な鬭争は高い様式の社會秩序と必ずしも兩立しないものではないばかりか、却つて一層高くして有利な社會的適應をすら遂げしめるものであるから、個人にとつても亦團體にとつても共に有益なものであるに相違ない。

一切の社會的變化とか順應などには無くてならぬ争鬭の一要素があるものであつて、淘汰の行はれるのは畢竟するに人と人、習性と習性、思想と思想而して標準と標準との間の争鬭若くは競争に由るの外はないから、従つて社會に於ける諸々の感興や理想や制度やの間の漸進的の競争は、社會進歩の一方

法であると同時に、又必ずしも社會秩序に反對するものでもない。

然しながら社會生活中の争鬭を讚美する人々の一般に意味する所は吾々の普通に所謂競争では決してなく、其れは寧ろ人々の間若くは團體の間に於ける絶對的の敵對を意味するもの、ようであるが、此の様な意味での争鬭は苟も其れが存在する限りは人々の間に何等の固定した調和的關係もあり得ないから、其れは單に社會秩序を妨げるばかりでなく、又實に社會秩序と正しく相反するものと云はなければならぬ。

即ち此種の争鬭は一層高くして善い社會秩序を誘發することのないばかりか、動もすれば却つて高い社會的價値を破壊して多少なり野蠻状態に復歸せしめようとする傾向あるものであるから、此の様な變的な軋轢からは固より高級な社會秩序などは期待もされないのみならず、其れが永らく持續してゐると遂には社會的解體をも惹き起さすには措かないでもある。



一體斯くの如き争闘は如何なる原因から發生するのであらうかと考へて見るに、其れは主として古い習性を破毀して新しい習性を建設しようとする社會に於ける不斷の協整作用に基因するものであつて、一般に何等の騷動も將た衝突もなく、或は多くの場合個人には其の變化をさへ明確に意識せしめなうで行はるゝものではあるが、而も尙ほ習性は個人生活と社會生活兩らに於て不斷に變形されなければならぬものである。

斯くて變化は絶へず人々にも環境にも起りて舊い社會的習性は最早や役に立たなくなり、云はゞ討議や暗示や模倣や輿論の形成や思想並に理想の淘汰等によりて、諸個人間の新しい社會的調整若くは順應が築き上げられ、其れが都合好い結果を奏すると、持續して新しい社會的習性となるものであるが一般に其の間の討議にも參加したり暗示も受けたり模倣もしたり、或は思想や理想やを受取つたり又自分で首領や役員やを選出したりしながらも、個人

は全く其れを意識すらしなうで新しい社會的調整は建設されるのである。

が、時とすると其れを建設するに充分な刺戟を見出すことが出来ないで、新しい調和的の協調を成し遂げることの出来ない場合もないではない。即ち社會生活の悲劇が這入つて來るのは多く此の際である。と云ふのは集團の内争闘とか敵意とかが起つて來る機會は全く此の際な場合であるからであつて、例へば親と兒は幼時に於ては互に協調的の態度で殆ど水も漏さぬほどの調和的關係に在るものであるが、多くの場合其の様な協調的の態度は兒供の成長と共に變形されなければならぬものである事を親が忘却する結果、舊い社會的調和は最早や保たれなくなつて爰に破毀され、更に之れに代はるべき新しい協調を成し遂げる適的な刺戟が見出されないで爰に親と兒の悲しむべき争闘が起るのである。が夫と妻との關係も其他一切の社會的關係も一つとして此の理に漏るゝことはない。



であるから集團内に於ける人々の争闘は、要するに相互に關する安定せる環境を形造り得るようになり、新しい生活境遇に適應した新しい社會的協調を仕遂げ得ないために發生するものであつて、其の結果は習性の葛藤となり斯くして遂には集團其者をさへ分解せしめずには措かないのであるが、然し一つの集團と他の集團との争闘が之れと全然趣きを異にせるものであることは云ふまでもない。

### 第九節 社會秩序と社會革命

小さな集團の一層親密な社會的關係に於ける如く、民族や國民やの一層廣大な社會組織に於ても理窟は全く同然であつて、一般に生活境遇の變化するに従ひ例へば公衆の批評であるとか自由討議であるとか乃至は輿論の形成や人々の淘汰等兎に角平和的手段によりて社會的に決定された一定の行動を

實行すべく徐々と舊い制度は新しい制度に代られ、斯くして一民族若くは一國民の制度は何等の支障もなく絶えず變化を續けるものである。

が、時とすると社會的更整を仕遂げる機關が缺乏したり或は不完全に發達したりした爲め、社會的習性が割合に固まつて動かなくなることがある。さうなると社會は恰も固結した習性を持つた個人のやうに、怎うにも恂うにも動きがとれなくなるものであつて、吾々が革命と稱する諸階級間の血腥ちなよぐさき闘争が起るのは即ち其の様な期間でなければならぬ。

換言すれば革命は社會的機制體に普通の社會的更整が仕遂げられない場合の或種の故障に基因するものであつて、更に言ひ換へると其れは新しい社會秩序の基本である新しい習性を改造することの困難な境遇の下で、舊い社會的習性を全然破壊し去つたことに、基因する社會秩序の混亂であるに相違ない。



社會は個人と同じく如何なる理由の下にもせよ、其の習性が一たび硬直状態に這入ると多くの場合危険を伴ふものであつて、即ち不斷の變化と絶えざる奮闘とを本質とする生物界に於ては、單り高度の順應性を維持し得る有機體のみ生存することが可能だから、従つて社會的習性にして一たび固結して融通が利かなくなるに至らば、其の社會は既に由々しい破綻に一步を歩み出せるものと云ふことが可能であらう。

而して此の様な破綻は主として二つの形式をとりて來るものであつて、其の一つは外敵による征服若く服従の形式、二は生活境遇が舊い習性と制度とをして最早や役立たしめなくなるまでに充分變化した場合に、内部の破裂即ち革命の形式で來るものであるが、前者は吾々の爰で論ずる限りでないとして、一般に革命は前にも云へるやうに一つの社會的習性から他への遷移的行程たる公衆批評や自由討議や而して輿論やの社會的機關が半ば破壊されてゐ

る際に起るものである。

従つて多くの場合革命は主として專制政治の附隨物ではあるが、併し貴族政治や寡頭政治にも亦必ずしも社會組織の澁滯状態は伴はないものでもないから、従つて社會的革命は起らないでもなかつた。が、何と云つても革命を誘發する幾多の要因を包藏してゐるものは、實に一層大きくして高い且つ新しい社會的環境に適應する所以の新しい習性を形造る機關である思想の合理的自由や言論の合理的自由や、従つて輿論の形式やを抑壓する專制政治其の者でなければならぬ。

而して舊い習性或制定やが如何にして顛覆されるかに就き更に具體的に述べて見ると、大體に於て舊い社會的習性からは最も少く薰染されてゐると同時に、新しい生活境遇に對しては最も多く渴仰してゐる人々が一體となりて舊い社會的習性或制度やに對し叛旗を擧げることから初まるものであつて、



其の際は等の崩れかゝる一角は先づ其の一番弱い點、即ち舊い習性の力が最も少く働いてゐる人々、若くは他の方面に感興の向いてゐる人々の内からでなければならぬ。

斯くて是等の人々から次第に反抗的態度が模倣と暗示とによりて、段々と感染し易い人々へと擴がつて行つて、遂には舊い習性や制度やをして殆ど力を振ふの餘地なからしむるまでに叛徒の勢力は増大するものであるが、此の場合叛黨の既成的社會秩序を攻撃するするに用ゐる武器が、概して或種の破壊的且つ分解誘導的思想である事は、少くとも現状維持者——社會の進歩と民衆の安寧とに彼等が寄與すると否とは差當り敢て問はない——には大に注目すべき點であらう。

社會に於ける思想の働きは人々の活動を建設もすれば又分裂もさするものであつて、即ち一方には非常に發達した社會生活の諸制定の基礎をなす協調

的の思想や信念や主義やがあるに對し、他方には何等の固定した調和的な社會秩序の基本ともならない或種の破壊的思想もないではない。

而して其の破壊が果して文字通りに社會の文化的業績を悉く烏有に歸して民衆を擧げて蠻的境遇に還元さする意味での破壊であるか、それとも亦一層完全にして且つ高級な社會生活を達成するための所謂建設のための破壊であるかを辨別する事は、非常に深い社會學的の智識を要するものであつて、一般に革命期に近づくると人々の批評は、多く現在の社會的施設の缺陷を指摘することから始まつて遂には純然たる無政府思想に終り、斯くて既成の社會秩序とは全然相容れない革命の機運を醸成するものである。

x x x x x

以上の外、社會秩序に關しては更に述べべきことは數々あるけれども餘白が容さないから劣略するが、之れを要するに社會秩序は餘りに多く實際的及



び倫理的の色彩を帯びてゐるから、従つて純然たる科學の研究對象たるよりは、寧ろ既に論究した理論的社會原理の應用問題とでも稱して然るべきものであるかも知れぬけれども、其れにも拘らず社會の安定的方面として開が社會學の中に重要な位地を占むべきものであることは云ふまでない。

## 本章の主要參考書

1. Comte, A, "Philosophie positive", vol. IV. *passim*.
1. /, "System of Positive Polity", *passim*.
1. Ellwood, "Sociology in its Psychological Aspects", chap. XII.
1. /, "The Social Problem", chap. V.
1. /, "Introduction to Social Psychology", chap. XII.
1. Blackmaz & Gillin, "Outlines of Sociology", PP. 349—412

1. Cooley, "Social Organization", PP. 359—419.
1. Hobhouse, "Morals in Evolution", vol. I, chaps. III—VIII.
1. /, "Social Evolution & Political Theory", chaps. VI, VIII, IX.
1. Novicow, "Mecanisme et Limites de l' Association Humaine".
1. Ross, "Social Control".
1. Wallas, "The Great Society", chaps. XII, XIII.
1. King, "Education for Social Efficiency", chaps. II—VI.
1. Tenba, "Psychological Study of Religion", PP. 326—336.
1. Ward, "Pure Sociology", PP. 555—575,
1. /, "Dynamic Sociology".
1. Ward, Edward J., "Social Center", *passim*.
1. Adams, Jane, "Democracy & Social Ethics"



1. Schaeffle, A., "Bau und Leben des Sozialen Körpers", Band I, SS. 689—700
1. Kidd, B., "Western Civilization".
1. Giddings, "Elements of Sociology", chap. XIX.
1. #, "Descriptive & Historical Sociology", PP. 522—540
1. #, "Principles of Sociology", PP. 420—422.
1. Steinmetz, "Die Philosophie des Krieges".
1. Norman-Angel, "Great Illusion".
1. Gumplowicz, "Grundriss der Soziologie".
1. #, "Der Rassenkampf".
1. 建部遜吾氏著「社會學序説」
1. 同上著「社會靜學」
1. 同上著「普通社會學」

## 第六篇

### 第一章 社會の進歩

#### 總說

社會の進歩は本來理智的作用の成果であつて、嚴密に云ふと社會の進化とも或は變化とも異り、云はゞ人間の生活條件の改善を意味するものであるから、従つて社會進歩の理論は社會秩序のそれと同様に、嚴密な意味での純粹科學の領域からは少しく遠ざかつてゐて、社會學的理論であると同様に又倫理的のそれでもある。

で、社會進歩の如何なるものであるかを最後に決定するものは主として倫理學者の役目であるが、然し倫理學者が最後の規範を確立するに立立ち、其の



先導を務めるものは云ふまでもなく社會學者でなければならぬから、此の點から云ふと社會進歩の理論に關する兩者の役目は、共に重大なものであつて孰れを何れと軒輊することは可能ない。

既に前でも言ふたように元來一切の社會諸科學の對象は歸着する所も同じく人間生活並に其の改善に存するものに外ならないから、従つて彼等の題目が多く、點で互に相接觸し若くは疊かさなり合ふと共に、且つ其の動機が動もすれば實際的に涉らうとするのは固より當然のことであつて、社會學にして苟くも社會的の性質を帯びてゐるものとする限り——これは名譽詮自稱の沙汰だから勿論云ふまでもないことではあるが——其れが先見的並に實際的の側面をも持つてゐるのは決して咎むべきことではない。

即ち將來の社會變化や其の方向や、並に之れを支配する方法やを考察したり、或は吾々が進歩的と判斷する社會變化の中で人間的の要因と非人的の要

因とは何れが重大であるかを考究したり、復た或は社會の進歩は執意的合理的に計畫され且つ支配されるものであるか等を觀察することは固より社會學の領分であつて、社會學にして苟も是等の問題に或程度の科學的洞察を下し得ないものである以上、ワードの云つてゐるように其れは確に一切の科學中で最も無用なもの、一つでなければならぬ。

が、既に前來の諸編で讀者の諒解されたであらうように社會學は主として人間生活の關係的諸方面並に其の將來の成行をも取扱ふものであるから、従つて是れまで述べただけでも、爛眼なる讀者には社會進歩に關して既に一通り理會はされたことであらうとは思ふけれども、社會學にとつて其れが極めて重大な地位を占めてゐるものであるだけに、尙ほ概括的に論述しなければならぬ幾多の問題が残つてゐる。そこで爰では其等を最も總約的に略述す、積りである。



## 第一節 社會進步の定義

僅々數語を並べて社會の進歩を定義しようと思つても其れは到底不可能のことである上に、縦ひ實際可能なことであるにした所で、其れで讀者に幾何程度の智識を増させる譯でもなからうと思ふから、必ずしも爰では形<sup>かた</sup>なりの定義は下さないで、主として社會進歩の本質に關する一渡りの概念を讀者に與へ、斯くして今後論述する本章の諸理論を理解する資けにしようと思ふ。

云ふ迄もなく社會が進歩するには必ずや變化しなければならぬものではあるが、併し社會に於ける一切の變化を以て悉く進歩的と稱する事は不可能ないのであつて、即ち變化には進歩的のものもあれば又退歩的のものもあるから、それでホツブハウスの解釋してゐるように、若しも社會の進歩を「人々が價値を附し或は合理的に附し得る諸性質<sup>コリチズ</sup>に關する社會生活の發達」とすること

が可能ならば、然らば吾々は如何なる社會變化が果して吾々の價値を附し或は附さなければならぬものである歟と問ふことが可能であらう。

其の一例として吾々は一般に自然界を征服して人類の資用に供さるゝ變化を稱して進歩的となし、従つて機械的の發明とか經濟上の繁榮などは總じて人が自然界を征服する所以の武器であり、且つ人をして一層善く其の環境に適應せしむるものであるからと云ふので以て進歩の表徴であると考へられてゐると共に、復た人々の間や集團と集團との間に一層調和的關係を助成する政治的境遇や道德的標準などの變化をも、同様に進歩的と見做されてゐるのを以て察すれば、社會の進歩には自然界の統御と自己の統御との二重の意味が含蓄されてゐるものに相違ない。

即ち其れは一方に於ては社會的集團をして自らの生存の要求に對して於善く自らを調整せしむると同時に、他方に於ては一層廣くして普遍的な環境に



適應せしむるから、従つて社會や文明やの一層多く生存し得る能力と、一層多く協力して共同生活を營み得る能率と、且つ人々の關係や諸集團間の關係やが一層調和的となることを意味するものでなければならぬ。で、一言にして之れを盡すと社會進歩とは人類の社會的生存と社會的能率と而して社會的調和とを助成する一切の活動を包括せるものに相違ない。

一部の社會學者は社會進歩の主なる規準を以て社會組織の増々複雑となることとなしてゐるけれども、社會の構造は如何ほど複雑となつても、社會的生存や能率や或は調和やの社會的能力は却つて増々低減する場合もないではないから、縦へ社會構造の増々複雑を加ふることは概して進歩的變化の表徴となるものではあつても、而も是れを以て直に社會進歩の目標とすることは決して當を得たものでない。

また一部の社會學者は社會の進歩を主として分業と社會生活の相互依從

の増加に在るものとなしてゐるのであるが、是れも前説と同様に批評することが可能であらう。然るに一方には前二者と全然趣きを異にして社會進歩を専ら主觀的に解釋し、之れを主として人類の幸福の増加、換言すれば一般的の苦しい恐しい不愉快な状態から、一般的の愉快な幸福な境遇への遷移、更に端的に言ふと即ち苦痛經濟から快樂經濟への轉化に在るとなしてゐるのであるが、固より眞正な社會進歩は畢竟人間の幸福を増進するために働かなければならぬものではあつても、而も幸福の増進は高々社會進歩の附隨的成果若くは一つの要素たるに過ぎないから、之れを直ちに進歩てふことの主觀的の規準とは見做すことが可能ないのである。

然らば社會の進歩てふことは果して如何なる規準の下に解釋さるべきであらうか。吾々はコムトの主張——固より彼れの人類觀はスモールなども指摘してゐるやうに多くの場合歐洲の外には出でない餘りに狹隘なものではあつ



たが——に從ひ或は特にエルウツドの見解に基づき、即ち人類全體を其の目標とし題目として解きたいのであつて、苟も人間の一切の集團關係にして非調和的である以上、復た苟も人類全體にして自らと自らの環境とを統御するに一層の能率を發揮し、從つて生存するに一層の能力を示さない限り、开は決して完全な進歩とは稱することが可能ない。

と云ふのは小さな集團内にも固より比較的の社會進歩はあり得ないものではないが、然し此の様な進歩の結果が漸次人類全體に推し擴がつて了ふまでは其れは到底永續するものではないからであつて、此の點から云ふと社會の進歩は全く世界的の環境に一層善く各自を適應することを必要條件とし、從つて其の目標は人類全體の調和的關係にあるものと稱することが可能であらう。

今、エルウツドに從ひ社會の進歩を定義し見ると、「人類生活の内的或は外

的、現前或は遠隔の一切の要因を調和させるやう社會的生存の要求に増々適應し、斯くて其の異つた要素間に可能だけ多くの調和と相互協力の最大の能率と、而して社會殘存の最大の能力とを確保すること」となるのであるが、假りに此の定義を誤りないものと見做しても、更に次ぎの様な疑問が起らなければならぬ筈である。即ち其の變化を決定して退歩的よりは寧ろ進歩的たらしむる要因は抑も何であらうか、將た是等の要因は如何にして統制され得るものであらうかと。

此の疑問は實に或點まではプラトウ以來現今に至るまで殆ど凡ゆる社會的思想家によりて論究され、從つて社會進歩に關しても様々な幾多の理論は提起されたのであるが、而し其の多くは要するに社會變化の一方面のみを觀察した所謂眇眼觀たるを免れなかつた。吾々は爰で其の悉くを論述することは可能ないが、最近多くの新進社會學者によりて認められてゐる所謂社會進歩